ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第140号

令和元年度における京都府内の埋蔵文化財調査----------筒井崇史------1
研究ノート　上京警察署と府廳のうつわ----------加藤雄太------7
共同研究40年----------小池　寛------15
令和２年度発掘調査略報----------19
７．平ヶ岡古墳群第２次
８．新町遺跡第２次
９．稚児野遺跡第３次
10．水主神社遺跡第14次
11．小樋尻遺跡第10次
12．小樋尻遺跡第10・11次（Ｃ５・Ｃ６区）
13．芝山遺跡・芝山古墳群第21次
14．堂後遺跡第１次・大岩原遺跡第１次
長岡京跡調査だより・136----------33
現地公開（令和３年２月～令和３年７月）----------35
普及啓発事業（令和３年２月～令和３年７月）----------37
センターの動向（令和３年２月～令和３年７月）----------39

2021年9月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

令和元年度における京都府内の埋蔵文化財調査

筒井崇史

１．はじめに

令和元年度に当調査研究センターが実施した発掘調査は、事業件数21件（整理報告１件を含む）を数える。事業としては、新名神高速道路整備事業と国営農地整備事業を中心に、国道事業や府道事業等の道路建設関係が大きな割合を占めている。また、丹後地域・中丹地域において小規模な発掘調査を７件実施しており、京都府北部での発掘調査事例が増えつつある。このほか平成27年度から30年度にかけて調査を実施した岡田国遺跡の報告書をはじめ２冊の報告集を刊行した。

以下では、当調査研究センターの事業を中心に令和元年度に京都府内で実施された発掘調査の成果について概観することとしたい。

なお、令和元年度に京都府内において実施した発掘調査の概要については、本来、昨年度刊行の『京都府埋蔵文化財情報』において報告すべきであったが、諸般の事情により、本号において報告するものである。なお、令和２年度の京都府内における発掘調査の概要については次号において報告を予定しいている。

２．各時代の調査成果

（１）旧石器・縄文時代

京丹後市上野遺跡は、日本海に面する海岸段丘城に立地する遺跡で、今回の調査では姶良丹沢火山灰層（約３万年前噴出）と大山倉吉軽石層（約６万年前噴出）を確認し、両層に挟まれた古土壌

上野遺跡全景

層から台形石器や鋸歯縁石器などが出土した。京都府内でも最古級の後期旧石器時代の遺跡であることが明らかになった。

福知山市稚児野遺跡では、遺構の有無等を確認するための小規模調査を実施したところ、10か所中７か所のトレンチで、サヌカイトやチャート、黒曜石などを石材とするナイフ形石器や掻器、削器などが出土した。形態等から後期旧石器時代のものと考えられ、今後、本調査を実施する予定である。

城陽市水主神社東遺跡では、縄文時代晩期の流路を１条確認した。南北方向に緩やかに蛇行する流路で、検出長約42m、幅８～11m、深さ約2.3mを測る。流路下層では、木組遺構や木道、杭などが確認された。周辺からはイチイガシやオニグルミ、トチノキなどの種子やカシなどの広

水主神社東遺跡流路全景

美濃山遺跡全景

葉樹が出土しており、木組遺構や木道は、これらの種子や木材の加工を行うためのものと考えられる。これらの遺構は水辺を利用した生活空間の一部と考えられ、周辺に同時期の集落の存在が予想される。

（２）弥生時代

舞鶴市菖蒲谷口遺跡では、遺跡の概要を把握するための小規模調査を実施したところ、弥生土器と柱穴を確認した。詳細は今後の本調査によるが、調査地の南500mに位置する満願寺跡（後述する調査地点とは別地点）では大量の弥生土器が表採でき、当該地一帯に弥生時代の遺跡が広がる可能性がある。

八幡市美濃山遺跡では、弥生時代後期の竪穴建物５基などを検出した。これまでの一連の調査で竪穴建物の総数は20基に達し、南山城地域有数の集落遺跡であることが明らかになった。

（３）古墳時代

亀岡市犬飼遺跡では、長さ15mを超える溝１条、掘立柱建物２棟などを確認した。溝１条、掘立柱建物１棟は古墳時代前期に位置づけられ、溝から土師器小型丸底土器・高杯・壺などが出土した。掘立柱建物１は古墳時代後期のものである。溝は、上半部が北東方向に横ずれしていることが確認できた。この横ずれは、調査地の南西方向に所在する雲仙ヶ岳の斜面崩落等で生じた地滑り的現象と考えられる。前期の掘立柱建物には同様の現象がみられるのに対して、後期の掘立柱建物には認められないことから、両者の間の時期にこの地滑り的現象が生じたと考えられる。

城陽市芝山古墳群では、古墳時代の円墳４基・方墳２基を確認した。６基の古墳のうち、３基で埋葬施設を確認した。いずれも木棺直葬で、須恵器・土師器、鉄刀・鉄鏃・鉄槍及び土玉などが出土した。このほか、飛鳥時代の竪穴建物５基、奈良時代の掘立柱建物２棟などを調査した。

城陽市小樋尻遺跡では、古墳時代の溝ないし流路３条を確認した（ＳＤ03・05・06）。このうちＳＤ03は北西から南東に向かって延びる流路で、幅7.3m以上、深さ1.4m以上の規模を測る。流

芝山遺跡全景

路の東側斜面で植物質を敷き詰めた、いわゆる敷葉工法の痕跡を確認した。次年度以降、隣接地も合わせて調査を実施し、溝の規模や機能などを明らかにする予定である。

（4）古代

長岡京市長岡京跡・開田遺跡で、攪乱で遺構面の大半が失われていたが、長岡京期と推定される柱穴４基を確認した。南北方向を指向することから、掘立柱建物または柵の一部と考えられる。

八幡市美濃山遺跡では、飛鳥時代から奈良時代にかけての掘立柱建物２棟や道路状遺構１条、土坑４基、溝３条などを確認した。一連の調査で掘立柱建物の総数は37棟を数える大規模な集落であることが明らかになった。これらの建物は、大きく４群にわかれて分布しており、それぞれ重複等が認められた。道路状遺構は集落への進入路と考えられる。

（5）中世

京丹後市丹後町川向遺跡では、石仏や五輪塔などが30点以上出土したが、いずれも２次的に移動させられたもので、墓地等の遺構は確認されなかった。これらの石造物は、地元の凝灰岩製で中世後期に製作されたものと考えられる。

京丹後市峰山町丹波丸山古墳群では、前年度の調査で確認していた遺構の調査を引き続き実施し、中世墓や経塚であることを確認した。経塚は円形土坑の側面に横穴を設け、その中に須恵器の甕と片口鉢の外容器を収めていた。外容器の周囲には石材を立てていた。外容器の内部には経筒や経巻は確認できなかった。

舞鶴市満願寺跡では、平安時代末～室町時代の礎石建物４棟や石組み溝などを確認した。また、焼土と炭層が確認され、建物の一部が火災にあっていることも判明した。この炭層などから土師器や瓦器のほか、中国製の陶磁器などが多数出土した。出土した輸入陶磁器のうち、黒釉線堆文壺は発掘調査による出土例として国内でも初めてのものであり注目される。

満願寺跡検出礎石建建物

犬飼遺跡方形居館跡全景

亀岡市犬飼遺跡では、鎌倉時代後期～室町時代前期の方形居館とその関連遺構を確認した。方形居館は、北側を段丘崖で画し、残りの三方に最大幅８ｍ、最大深さ２ｍの堀で囲う。方形居館の内部も堀によって区分されており、それぞれの区画で母屋と思われる建物１棟と付属する小型の建物１棟を検出した。地域の有力者が居住していたと考えられる。なお、古墳時代の項で紹介した犬飼遺跡とは隣の調査区となる。

亀岡市金生寺遺跡では、平安時代末から鎌倉時代前半にかけての掘立柱建物４棟や井戸１基、溝などを確認した。溝によって掘立柱建物や井戸が区画されており、集落内の構造の一端が明らかになった。また、これらの遺構群は土石流の堆積層の上に形成されていたことも確認できた。

京都市上京区平安京左京一条三坊三町跡では、室町時代後期（戦国時代前半）の堀を３条確認した（ＳＤ81・3550・3370）。ＳＤ81は北東から南西に延びる堀で、検出長22.5m、幅4.5m、深さ約２ｍを測る。ＳＤ3550は北東から南西に向かって弧状に延びる堀で、検出長12m、幅2.8m、深さ約1.3mを測る。堀は西端で、途切れる構造となっている。ＳＤ3370は東から西に延び、西端付近で南に緩やかに屈曲する堀である。検出長25m、幅約５ｍ、深さ約1.8mを測る。また、ＳＤ3370に沿って布掘り柱列が確認されている。櫓等の下部構造と考えられる。

八幡市木津川河床遺跡では、島畑９基と坪境を示す畔１条を確認した。この島畑は石清水八幡宮の社領地の一部であったと考えられる。

城陽市小樋尻遺跡では、島畑４基等を確認した。島畑の上面や島畑間の溝には素掘り溝などが確認でき、耕作に伴うものと考えられる。これまでの調査成果をまとめると遺跡の東部では島畑が造られていない様相が明らかになった。

（６）近世

宇治市茶壷蔵跡（創建）では、江戸時代に宇治茶を将軍に献上するために、新茶を詰めた壺を収めた蔵跡と推定される地点の調査を実施したが、大規模な攪乱等により、遺構等は確認できなか

平安京左京一条三坊三町跡全景

った。

綴喜郡宇治田原町保安塚では、直径2.6～2.7m、高さ0.5mほどの塚を確認し、その上面で20点前後の土師器皿が出土した。

３．まとめ

令和元年度に当調査研究センターが実施した調査の概要を報告した。令和元年度調査の大きな成果としては、京都府北部で相次いで旧石器時代の遺跡が確認されたことである。また、概要にも示したように中世の遺跡の調査事例が非常に多く、寺院跡に関するもの、集落・居館に関するもの、戦国期の構に関するもの、島畑等の生産に関するものなど、多岐にわたる成果をあげることができた。

（つつい・たかふみ＝当調査研究センター調査課課長補佐兼企画調整係長）

研究ノート

上京警察署と府廳のうつわ

加藤雄太

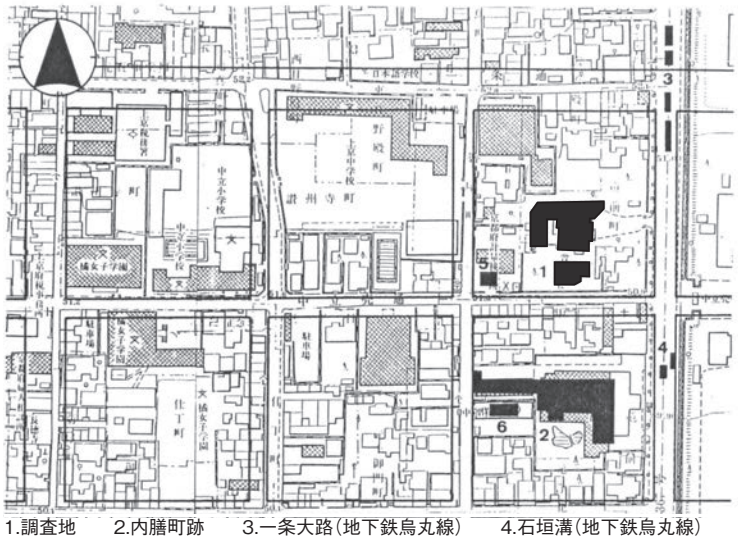
1．はじめに

今回紹介する資料は当調査研究センターが1986年から1987年にかけて実施した府民ホールの調査、平安京左京北辺三坊五町の地点(注1)で出土した「上警」および「府廳」と文字の書かれた陶器である。平安京左京北辺三坊五町の調査の資料報告は、報告書の他に伊野近富氏によるみぞろが池焼(注2)のほか、葵紋の京焼(注3)と禁裏御用品を扱ったもの(注4)がある。いずれも江戸時代前期および後期の資料であったが、今回は明治時代における当該地の位置づけを考えるうえで重要な資料について紹介する。

調査地点の所在地は京都市上京区烏丸通り中立売通り上ル龍前町で、弥生時代前期の内膳町遺跡にあたり、平安時代には内膳町が中立売通り向かいの南側に営まれていた。当該地はその後、里内裏が東辺に置かれ、中世後期にも連綿と人が暮らしを営んだ。天正14(1586)年には秀吉の聚楽第造営にともない多くの大名屋敷が建てられ、金箔瓦が葺かれていたが、文禄４(1595)年に聚楽第は破却される。寛永16(1639)年には半井盧庵が住まいし、元禄年間(1688～1703)には「松平スルカ守」、寛保元(1741)年には東園家、勧修寺家が調査地付近に居を構えたようである。また、延宝６(1678)年には京焼の一種である「みそ路池焼」の内窯があったという(第１図)。

2．平安京左京北辺三坊五町のＳＥ01の位置づけ

平安京左京北辺三坊五町の調査は府民ホールの建設が契機となり、複数のトレンチに分けて行われた。今回扱う資料が出土したのは第１トレンチのＳＥ01である。第１トレンチは調査範囲の北西に位置する。第３図は第１～４トレンチの平面図である。図の北西にトーンを掛けている範囲が、第４図平面図の範囲にあたる。多くの遺構が切りあっており、複雑な様相を呈していることがよくわかる。第４

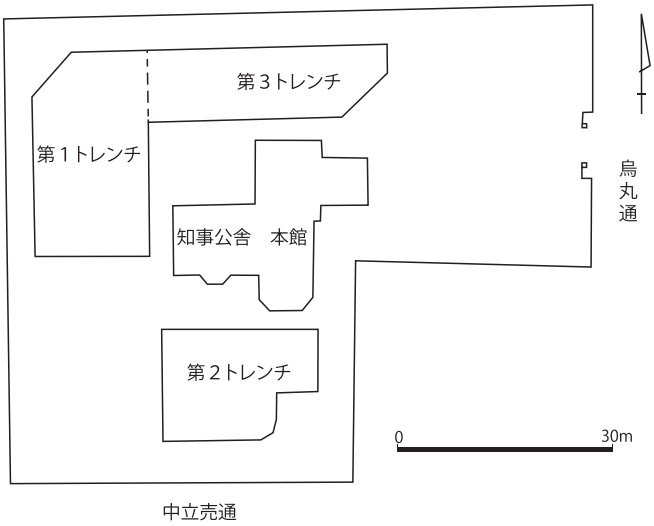


1.調査地　2.内膳町跡　3.一条大路(地下鉄烏丸線)　4.石垣溝(地下鉄烏丸線)
5.内膳町遺跡(京都府計量検定所)　6.内膳町(京都府保育所)

第１図　調査地周辺図(京埋セ1988)　一部改変

図は現地調査中当時に作成された25分の1スケールの遺構カードをトレースして作成している。

ＳＥ01はおよそ直径２ｍを測る石組の井戸で黒褐色(10YR3/1)の土が堆積していた。写真では裏込めに小さな石が詰められている状況が確認できる(写真１・２)。この井戸について、当時の調査記録を確認すると、検出面から１ｍほど内部を掘り下げた段階で「府廰」などの陶器が出土したとの記録が残されていた。また、そこから１ｍさらに掘削した段階でワイン瓶(第６図35)が出土したため、掘削を止めている。このような遺物が集中して出土した状況から、ＳＥ01の築造年代は不明ではあるが、近代に廃絶した井戸とみて差し支えなさそうである。

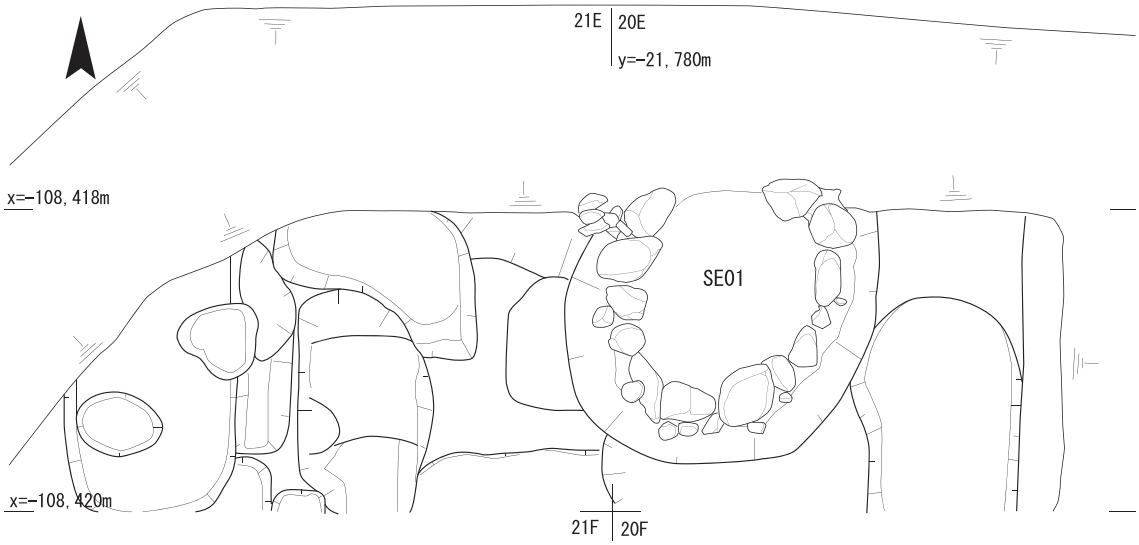


第２図　旧知事公舎と調査地(現地説明会資料をトレース)

３．ＳＥ01出土遺物

ＳＥ01から出土した資料は図のとおりである。第５図１～18は椀で一面に

第３図　調査地平面図(京埋セ1988)　一部改変



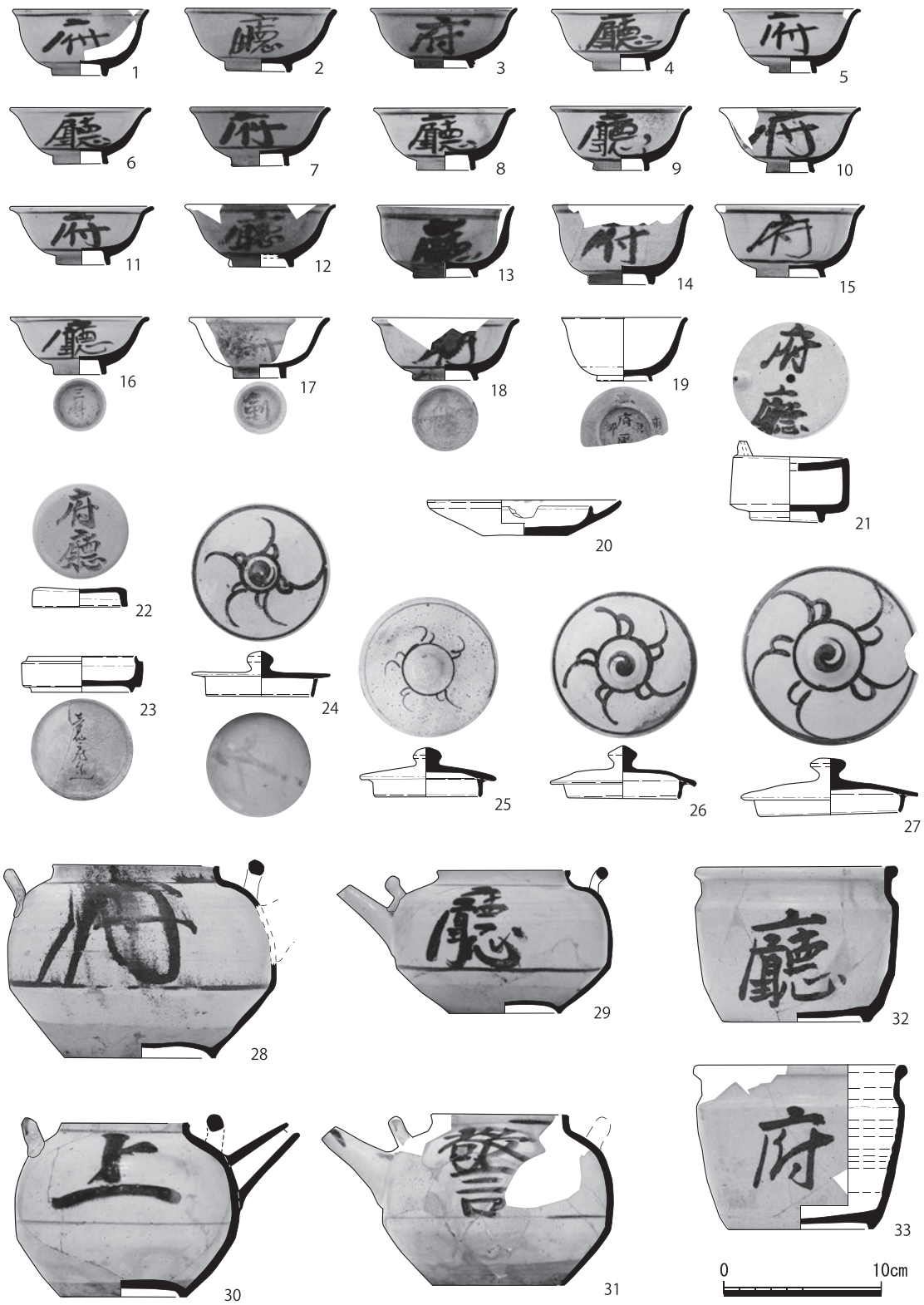
第４図　ＳＥ01平面図(S=1/50)

写真１　ＳＥ01検出状況(北から)

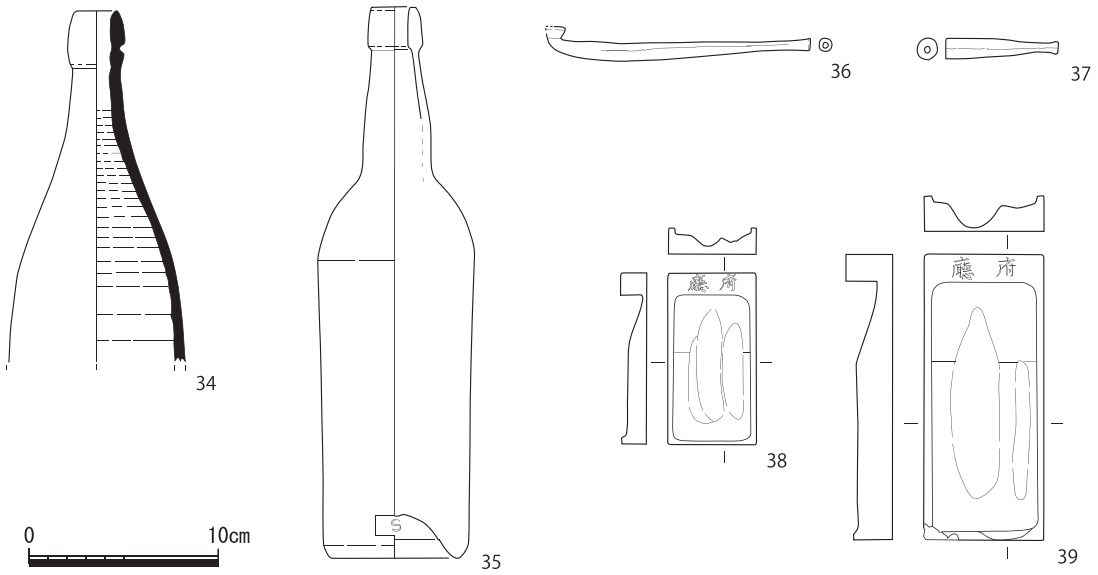
写真２　ＳＥ01完掘状況(北から)

「府」の字を書き、反対側に「廳」の字を書く。胎土から京・信楽系産の資料と考えられるが、灰白色で精良な胎土の資料と粒砂の混じる赤褐色のやや粗い胎土の資料(第５図２・３・12～14)の二種類が観察できる。19は鉄絵を施さないが､底部に「京都府廳」と墨書で二重書きしている。21は水滴で上面に「府廳」と鉄絵が施されている。22と23は合子であるが組み合わないのでそれぞれに別の身と蓋が存在していたのだろう。22には「府廳」、23には「壹仙房迩」と鉄絵が施される。23の文字列は工房などを意味すると思われるが詳細はわからない。24～27は土瓶の蓋で24には裏側に文字のようなものが書かれているが判読できない。28～31は土瓶で、28と29は一面に「府」の字､反対側に「廳」の字が鉄絵で施されている。30と31は「上」の字とその反対側に「警」の字が鉄絵で書かれる。32と33は広口の壺で内面は頸部から下に釉薬が施されていない。一面に「府」の字、その反対側に「廳」の字が書かれる。34は白磁の瓶で近代のビール瓶であると考えられる。35はワインを入れていたと思われるガラス瓶、36と37は煙管である。38と39は硯で38には朱が内面に良好に残存し、39は墨が内面に残っている。いずれも使用痕が残り、波止から陸にかけて激しく摩耗しており凹んでいる。海側の硯縁に「府廳」の字が彫り込まれている。

ＳＥ01出土遺物の多くに「府廳」の字が書かれていることから京都府庁に関連する遺物であると考えられるが､土瓶に「上」と「警」が書かれていることに留意したい。これは「上京警察署」を意味していると考えられる。



第５図　ＳＥ01出土遺物１



第６図　ＳＥ01出土遺物２

４．土地利用の変遷について

ＳＥ01から出土した資料はどのような組織が使用していたのか。これを検討するため江戸時代から昭和の発掘調査着手までの土地利用の変遷を確認しておく。

平安京左京北辺三坊五町の地点は調査が開始された時点では京都府知事の公舎が位置していた。知事公舎は大正９(1920)年に建てられた近代的な洋館・和館の施設で、施設範囲は取り壊したのち、第４トレンチとして調査を行っている。

18世紀以降、当該地は羽林家・東園家が住し、明治２(1869)年の京町御絵図が描かれた段階においても東園家の邸宅地であった。その後、明治９(1876)年に設置された出張所が明治10(1877)年に名称変更され上京警察署となり、当地に設置される。その後、上京警察署は明治25(1892)年に市内警察署に大きな変更が加えられる中で廃止される(注５)。しかし、明治28(1895)年の新撰京都古今全図では上京警察署がまだ位置していることから、地図と実際とで時間差が生じている可能性がある。もっとも、当地から上京警察署が無くなったのは間違いなく、大正４(1915)年には宅地となっていたようである。その後、大正９(1920)年には知事公舎が建てられる。

５．ＳＥ01出土遺物の使用者は誰か

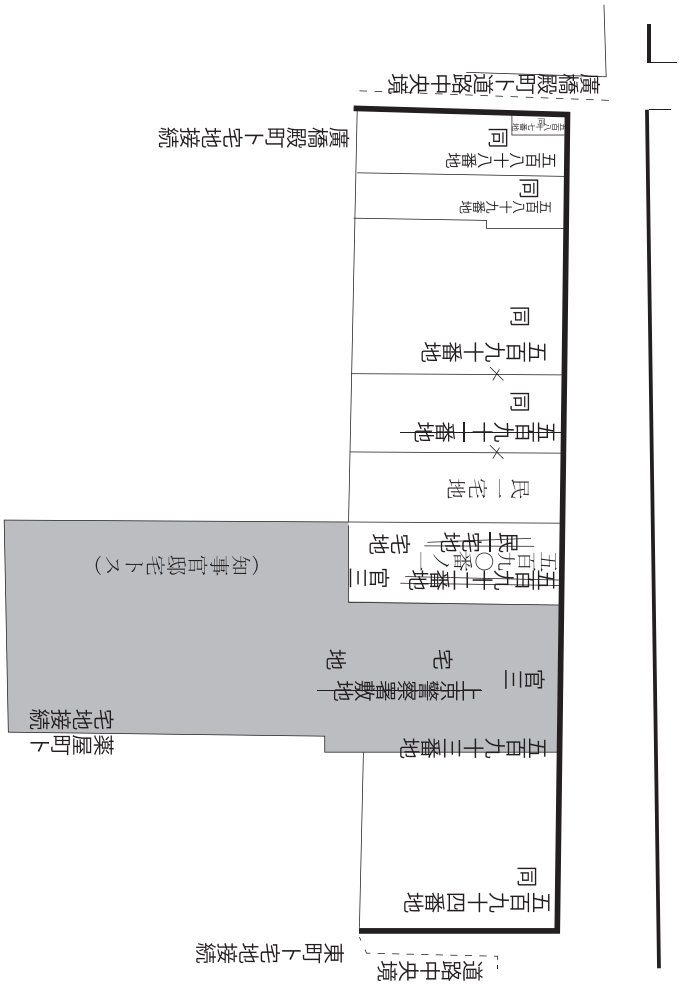
今回ＳＥ01から出土した資料には「上」「警」と書かれた土瓶が２点確認できる。これらは「上京警察署」に関連する資料ではないかと先述した。これについて、当地に上京警察署が位置していたことが記録から明らかとなったので、ＳＥ01の資料は上京警察署関連とみて問題ないだろう。

ＳＥ01の位置づけを土地の変遷から考えてみる。明治17(1884)年の上京区地籍図(注６)の龍前町全図を一部トレースして示している(第７図)。図上トーン掛けして示した範囲は調査が行われた地点の地籍全体を示している。当地に「上京警察署　敷地」と書かれていることが確認できる。ただ、

付表　ＳＥ01出土遺物観察表

番号	器種	器形	法量		胎土・色調	釉薬	備考
			口径・幅	器高			
1	陶器	椀	8.8	4.2	精良　灰白(5Y8/1)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
2	陶器	椀	9.7	4.1	粗土　灰黄(2.5Y7/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
3	陶器	椀	9.4	3.8	粗土　にぶい黄橙(10YR6/3)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
4	陶器	椀	8.8	3.9	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
5	陶器	椀	8.8	4.1	精良　灰白(5Y8/1)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
6	陶器	椀	9.0	3.6	精良　灰白(5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
7	陶器	椀	9.0	4.75	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
8	陶器	椀	9.0	4	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系　見込み目痕あり
9	陶器	椀	9.0	4.1	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系　見込み目痕あり
10	陶器	椀	9.0	42	精良　灰白(5Y8/1)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
11	陶器	椀	9.2	3.75	精良　灰白(5Y8/1)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
12	陶器	椀	9.6	4	粗土　にぶい赤褐(5Y5/4)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
13	陶器	椀	8.8	4.6	粗土　灰黄褐(10YR6/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
14	陶器	椀	9.0	5	粗土　にぶい赤褐色(5YR5/4)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
15	陶器	椀	9.5	5.6	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
16	陶器	椀	8.9	3.7	精良　灰白(5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系　高台内墨書「三科」
17	陶器	椀	8.9	3.9	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系 高台内墨書「剣」
18	陶器	椀	9.4	4	精良　灰白(2.5Y7/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系 高台内朱書「森」
19	陶器	椀	8.0	4.1	精良　灰白(10YR8/2)	灰	京・信楽系　底部墨書「京都府廳」
20	陶器	灯明受皿	12.4	2.3	精良　灰白(2.5Y8/2)	灰	京・信楽系　口縁煤付着
21	陶器	水滴	7.6	5.2	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府廳」 京・信楽系
22	陶器	合子　蓋	6.1	1.25	精良　にぶい橙(7.5YR7/3)	鉄絵	「府廳」 京・信楽系
23	陶器	合子　身	7.7	2.3	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	底部「壹仙房迩」か　京・信楽系
24	陶器	土瓶　蓋	8.8	2.9	精良　灰黄(2.5Y7/2)	鉄絵	京・信楽系
25	陶器	土瓶　蓋	8.7	3.2	精良　暗灰黄(2.5Y5/2)	鉄絵	京・信楽系
26	陶器	土瓶　蓋	9.3	3.4	精良　灰白(10YR8/2)	鉄絵	京・信楽系
27	陶器	土瓶　蓋	11.3	3.6	精良　灰白(2.5Y7/2)	鉄絵	京・信楽系
28	陶器	土瓶	15.6	12.9	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
29	陶器	土瓶	17.6	9.1	精良　灰白(7.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
30	陶器	土瓶	17.4	11.3	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「上」「警」 京・信楽系
31	陶器	土瓶	18.5	10.9	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「上」「警」 京・信楽系
32	陶器	広口壺	11.6	10	精良　灰白(2.5Y8/2)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
33	陶器	広口壺	13.6	10.5	精良　灰白(5Y8/1)	鉄絵	「府」「廳」 京・信楽系
34	磁器	瓶	2.4	(18.5)	精緻　白(N9/0)	透明	瀬戸美濃か
35	ガラス	瓶	8.2	29.2	オリーブ黒(10Y3/1)		
36	銅製品	延べ煙管	14.1	1.1			火皿一部欠け
37	銅製品	煙管吸口	6.0	1.1			
38	石製品	硯	4.7	9.1	粘板岩		「府廳」 朱付着　使用痕あり
39	石製品	硯	6.3	15.1	粘板岩		「府廳」 墨付着　使用痕あり

この記述に縦線で修正が加えられ、その隣に「宅　　地」とあるので、上京警察署が廃止されたのち宅地化したことが理解できる。また、その後年の筆によると思われる「知事官邸宅」は大正９(1920)年に建てられた知事公舎のことであろう。地籍からも土地変遷について齟齬は見られない。公家屋敷地であった当地は、近代では上京警察署、宅地、知事公舎と官・民・官と土地の所有者が変わってきている。このことから、前代の土地所有者から資材を受け取りそのまま使用していたとは考えにくい。もっとも、公家邸宅を公の施設として利用していた可能性はあるので、井戸の築造自体は江戸時代にさかのぼる可能性はあるが、上京警察署の施設を宅地化した段階でも使用し続けていたとは考えにくい。



第７図　上京區拾七組龍前町全図（上が北）
（トレース及び一部抜き出し）

こうした土地変遷を踏まえて、ＳＥ01について考えてみると、「府廳」と「上警」が書かれる遺物と関係のある施設は上京警察署しかなく、この警察署が位置していた明治10年から明治25年の15年間に使用されていたと考えていいだろう。これには当地が継続して公の施設による土地利用がなかったことからも判断できる。井戸は上京警察が廃止された段階で埋め立てられ、その時に不要となった陶器や遺物が廃棄されたものと考えられる。

このことから、ＳＥ01出土の遺物は廃棄年代を明治25(1892)年頃に想定でき、かつ生産年代を明治10(1877)年頃に比定できる資料である。もっとも、「府廳」と書かれた遺物については、京都府庁から必要分が運び込まれたとも考えられるので、京都府の発足した慶応４(1868)年から上京警察署廃止までの24年間とみておいた方がいいかもしれない。第５図19の椀は「府廳」と書かれていないが、墨書で「京都府廳」と二度記されている。おそらく府庁開設時に一定量の「府廳」椀が求められたが、必要個数を用意できず、間に合わせでまとめられた資料なのだろう。

また、ＳＥ01から出土した磁器の瓶(第６図34)は京都産の「ヒノマルビール」と思われる。明治10(1877)年に京都舎密局がビールの醸造研究をはじめ、その後京都ではビールの醸造会社がいくつか設置された。そのいくつかの企業の製品の一つが、機械栓が特徴的な「ヒノマルビール」

であるが、こちらは大阪麦酒会社の台頭により明治24(1891)年には廃業する[注7]ことがわかっているので、廃棄年代を考える上でも重要な資料である。こちらは生産期間と上京警察署の存続期間に齟齬はない。

出土遺物全体をみると、水滴や硯といった筆記の道具、明かりに用いる灯明受け皿、喫煙道具、喫茶の道具にまとめることができる。硯は激しく摩耗していることから仕事で長く使用した状況がうかがえる。数多く出土した茶碗からは、仕事の合間にお茶を楽しんだであろう様子がうかがえる。椀の底部に書かれた「三科」や「森」などは当時の職員の名前で、個人が所有していたことを示しているのだろう。

６．まとめ

今回扱った平安京左京北辺三坊五町ＳＥ01出土の遺物は、明治10年から25年にかけて設置されていた上京警察署で使用されていた陶磁器類であったことが明らかとなった。

こうした陶磁器は近代の京都の産業について考える上で重要な資料である。

謝辞　本稿を作成するにあたり、当時の調査担当者である伊野近富氏及び調査補助員として従事していた荒川仁佳子氏により多くの助言を賜った。記して感謝の意を表します。

（かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課調査員）

注１　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1988「平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第27冊

注２　伊野近富1998「京都市内出土の近世陶器」『京都府埋蔵文化財情報』第68号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注３　加藤雄太2019「平安京左京北辺三坊五町び葵紋の京焼について」『京都府埋蔵文化財情報』第135号　(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注４　加藤雄太2019「東園家邸跡出土の禁裏御用品―平安京左京北辺三坊五町の調査成果から―」『京都府埋蔵文化財情報』第136号　(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注５　京都市1975『京都の歴史８　古都の近代』京都市史編さん所　pp.65-66

注６　内務部第二課1884『上京区地籍図４』

注７　第百三十六回 京都とビール　京都ツウのススメ(最終閲覧日2021年5月21日)　https://www.okeihan.net/navi/kyoto_tsu/tsu201908.php

共同研究40年

小池　寛

１．はじめに

昭和56(1981)年度に設立された当調査研究センターは、令和２年度に設立40周年を迎えた。昨年度は、コロナ禍のなか京都府京都文化博物館での記念展覧会や記念講演会を実施した。また、今年度は、設立40周年事業の一環として、府民の方々への利便性の高い遺跡ガイドブックや記念論文集、そして、40年のあゆみなどの記念誌の刊行を予定している。

当調査研究センターでは５年ごとの周年事業とともに、毎年、埋蔵文化財セミナーの実施や機関誌『京都府埋蔵文化財情報』や京都府内の遺跡や遺物を深く理解するためのリーフレットの刊行、そして、「発掘された京都の歴史」展の開催などの普及啓発事業を実施している。これらの事業は、広く府民の方々を対象として実施している事業であり、多くの方々にご参加いただいている。

さて、本稿の主題である「共同研究」事業は、調査を担当する職員の資質向上と発掘調査成果の考古学的な研究を深めるために、当調査研究センターが設立された昭和56年度に計画立案され、設立２年後にあたる昭和57年度から始動した事業である。

ここでは、設立当初から実施してきた共同研究事業の概要を述べるとともに、職員がどのような考古資料の研究に取り組んできたかについて纏めておきたい。

２．共同研究事業の傾向と分析

当調査研究センターの共同研究事業は、開始時から現在に至るまでを大きく３段階に分けることができる。第１段階は、大半の調査課職員が参加し、各々分担しながら文字通り、共同で資料集成や分析を行った当該事業の草創期にあたる。第２段階は、グループ構成が数人規模の少人数となり、特定の考古資料の研究に賛同する職員が、資料調査や分析などを行った時期にあたる。そして、第３段階、つまり現在は少人数の研究事業を基層としながら、遺物の資料調査や分析だけではなく、それぞれの分析から導き出された仮説を裏付ける方法として、仮定に基づいた実験を行ったり、理化学分析を外部機関に委託するなどして、研究成果に客観性を持たせるなどを新たに行った時期に分けることができる。以下、時期別に各々の研究テーマについて述べるとともに、その傾向について概観しておきたい。

（１）第１段階の共同研究事業（昭和57年度～平成２年度）

設立２年にあたる昭和57年度から共同研究事業は本格的に始動する。当該事業の立ち上げには、昭和56年７月16日から平成元年３月31日まで調査研究面での指導をいただいた原口正三理事の功績が大きい。当時、大阪府高槻市と北部九州間で交互に実施されていたいわゆる「九阪研究会」は、弥生・古墳時代が研究テーマの主流であったが、当調査研究センター有志が昭和58年１月８・９

日に「**古代・中世墳墓の基礎的研究**」というテーマでの開催を担当した。当時、中世以降を研究の主軸におく研究会は、ほとんど開催されておらず、この九阪研究会の開催を契機として、中世以降の土器や墳墓、交易や物流に主眼をおく研究会が誕生することとなる。しかし、この九阪研究会の資料集成により、西日本の集成がなされたものの、集成された資料数は膨大であり、また、研究会自体が輪番での開催であったため、収集資料の類型化や地域性の把握など、十分な分析ができないまま終了した。このことを憂い、原口理事と当調査研究センター有志が中心となって、京都府教育委員会や高槻市教育委員会と連携して、昭和57・58年度に当該共同研究事業として引き継ぎ、基本台帳の作成や分類カード(パンチカード)を作成した。その後、それらのデータを必要とする研究機関に提供などを行い、データを私蔵することなく、中世墓制研究の進展に寄与することができた。

昭和58年度から同63年度には、複数の調査課職員を中心に京都府や各市町教育委員会の協力を得て「**京都府における弥生式土器の編年的研究**」事業を進めた。昭和58年度は丹後地域、昭和59年度は丹後・丹波地域、昭和60年度は丹波・山城地域、昭和61年度は山城地域の資料調査を行うとともに、昭和62年度に総括を行い、昭和63年度に『**京都府弥生土器集成**』を刊行した。当時、凡日本的に弥生土器を集成する図版集は刊行されていたが、都道府県では先駆的な刊行であり、その後の弥生土器研究自体に大きな影響を与えたばかりでなく、京都府内の弥生土器研究の礎となった。

一方、昭和63年度から平成２年度に実施した「**京都府の土師器・須恵器**」研究事業は、古墳時代をA班、歴史時代をB班に分け、出土地名表や編年的研究を実施した。『京都府土師器・須恵器集成』の刊行には至らなかったが、その基礎研究は、府内の土器研究の進展に寄与したといえる。その一部については『京都府埋蔵文化財情報』に公表している。

（２）第2段階の共同研究事業（平成３年度～平成21年度）

平成３年度以降は、第１段階とは異なり、２名から５名程度の職員による共同研究事業へと変化する。また、そのテーマも発掘調査で得られた成果をさらに深めるための研究や考古学の理論研究、広く西日本を研究の対象とする研究が主流となった。

当該期の主な研究として、旧石器時代から縄文時代を研究する職員で構成された「**土器出現前後の社会変化**」研究では、出現期土器の諸様相や石器の変化などについて資料調査を行った。「**京都府の古墳時代鉄鏃の集成**」では、府内全域を対象とした初めての集成作業であり、丹後･丹波･山城地域ごとの組成の違いを明らかにした。「**京都府における後期古墳の総合的研究**」「**畿内における横穴式石室の導入と展開の諸様相**」では、横穴式石室の起源研究や横穴式石室の改築についての研究が行われた。また、「**古墳時代成立期の副葬品の研究**」では、丹後半島を中心に当該期の埋葬施設から出土する鉄器の保有についての研究を行った。

広い地域や複数の時代の考古資料を研究対象とした「**中世土器の編年**」「**古代･中世の流通機構**」「**日本海域の古墳**」「**古代の官衙・官道**」「**京都府内における奈良・平安期の集落構造に関する基礎的研究**」「**弥生時代墓制の成立**」「**石器石材の産状と流通**」「**土器の広域移動と地域間交流**」「**古**

墳時代集落跡の属性研究」「**玉類製作技法検討**」「**玉作りの製作技法とその展開**」「**縄文晩期突帯文土器出現期の土器様相**」「**弥生時代における地域色の発現**」「**室町時代の貿易陶磁器**」などでは、年々増加する出土遺物の編年的研究や、丹後地域の前方後円墳を日本海沿岸地域に所在する首長墓との比較検討を行う研究、玉生産の総合的な検討、そして、中世土器研究などであり、それまでの調査・研究の総括的研究といえる。

その反面、特定の考古資料を対象とした共同研究の増加も一方ではみられる。「**京都府内における銅剣形石剣の出土とその背景**」「**古墳時代中期における南山城地域の製塩土器**」「**赤坂今井墳丘墓と日本海域の弥生墓制**」「**弥生時代の双孔剣とその系譜**」「**器材埴輪の変遷と地域性の検討**」「**古墳時代中期における石製品の生産と流通**」「**木津川市馬場南遺跡の基礎研究**」などがある。その中にあって「**古墳時代中期における石製品の生産と流通**」では、内陸部に所在する古墳時代中期集落から出土する軽石製品に着目し、滑石や製塩土器が紀の川流域や紀淡海峡からもたらされる交易を背景とし、和歌山県の紀淡海峡から串本間に所在する砂浜に漂着した軽石が流通した仮説を裏付けるため、漂着軽石の採集を行った。

なお、「**考古学理論の基礎的研究**」は、考古学研究会（岡山大学）が主導した理論考古学を先導する研究であった。

（３）第３段階の共同研究事業（平成22年度～現在）

平成22年度から現在に至る共同研究は、従来と同じように土器や鉄器などの資料調査を行い、その観察を基に編年を組み立てたり、地域性を探る研究が継続される一方、理化学分析や実験考古学を取り入れた研究が実施されるようになる。近年、発掘調査で出土した遺物や堆積層、遺構内の埋土などの理化学分析が、全国的に広く実施されるようになったが、当該共同研究事業においても同じ傾向がみられるようになる。

なお、資料調査を中心とする研究として、「**木津川市上狛北遺跡出土遺物の基礎研究**」「**丹波地域の古墳時代鉄器文化の特質について**」「**古代における「繊維製品」の研究**」「**日本海周辺地域における弥生時代後期～古墳時代初頭の地域間交流**」「**日本海沿岸出土の輸入陶磁器**」「**帯金式成立段階における短甲の基礎的研究**」「**北部九州における瀬戸内技法の流入時期について**」「**丹波の古代寺院と瓦**」「**中世丹後の土器・陶磁器**」「**擬凹線文土器様式の成立と展開**」などがある。

一方、理化学分析や実験考古学を取り入れた研究として実施された「**ドングリ食の復元と縄文人の通年利用戦略**」は、共同研究員が採集したコナラ・アラカシ・クヌギのアク抜きを加熱方法と水さらし方法で行い、採取したでんぷんのアクの主成分であるタンニン酸の含有量と栄養成分、エネルギー熱量を分析し、比較するといった画期的な研究である。縄文時代の食物研究の新しい研究として注目された。「**馬場南遺跡出土の燈明皿の実態的研究**」は、同遺跡から約6,000点出土した奈良時代の土師器皿を観察し、煤の付着状況を確認した。市販の椀や皿に純正ごま油を注ぎ、絹を灯芯として使用した点火実験を行った。「**美濃山地域出土の古代銅製品に関する研究**」では、隣接する荒坂横穴墓から出土した瑞雲双鸞八花鏡が美濃山廃寺からもたらされ、副葬されたとの仮定を基に同鏡の理化学分析を行った。「**弥生時代有孔土器の再検討**」では、底部穿孔土器の使

付表　共同研究テーマ分類表

	墓制	集落	竪穴建物	官衙	特定遺跡	流通	地域様相	食物	実験	化学分析	副葬品	装身具	土器	石器	鉄器	埴輪	鏡	甲冑	陶磁器	製塩	瓦	石造物	繊維製品	理論	活用
旧石器時代													2	1											
縄文時代								1					1												
弥生時代	2		1				1					2	3	4											
古墳時代	5	2				1					1	1	3	2	2	1	1	1		1					
飛鳥時代													1												
奈良時代	1	2		1	2				1				3								1		1		
平安時代	1	1		1		1							1				1						1		
鎌倉・室町時代	1					1							5						2			1			
戦国時代													1												
江戸時代																									
明治時代																									
大正・昭和時代																									
考古学全般																								1	1

用方法を明らかにするために、作陶したうえで炊飯実験を行い、一穴が十分な蒸気孔として機能することを裏付けた。

３．まとめ

以上を時代ごと、項目ごとに分類すると別表となる。40年間で実に数多くの共同・個人研究が行われたことになる。今後は今までの路線を継承しつつ、多岐に亘る研究テーマでの実施に期待を寄せている。この２年間、コロナ禍による資料収集に支障が生じているが、収束をまって改めて再出発したいと思っている。

当調査研究センターでは、設立時の職員の退職と同時に新規採用職員を採用する時期に差し掛かっており、いろいろな業務をスムーズに継承することに苦慮する場面も少なくない。この共同研究事業も前例踏襲することなく、新たな視点の導入により進化することを祈念している。

共同研究の成果は、『京都府埋蔵文化財情報』で公表するとともに、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック「関西考古学の日」の取組としてセンターで実施している講座においても発表することがある。今後は、埋蔵文化財セミナーや「発掘された京都の歴史」展でのコーナー展示などにも参画するなどの事業展開を模索したい。

平成元年からご指導いただいた都出比呂志理事が、令和３年６月をもってご退任された。採択委員としてご指導をいただくとともに、たびたび、ご自宅にお邪魔し、研究成果を奥様にもご報告し、談笑したことを思い出す。先生の益々のご健勝を心より祈念しております。

また、平成28年６月から理事にご就任いただいている菱田哲郎理事に共同研究の採択委員をお引き受けいただき、いろいろなご指導をいただいている。引き続きのご教導をお願いしたい。

（こいけ・ひろし＝当調査研究センター調査課長）

令和２年度発掘調査略報

７．平ヶ岡古墳群第２次

所 在 地　京丹後市峰山町丹波・矢田

調査期間　令和２年９月28日～令和３年１月22日

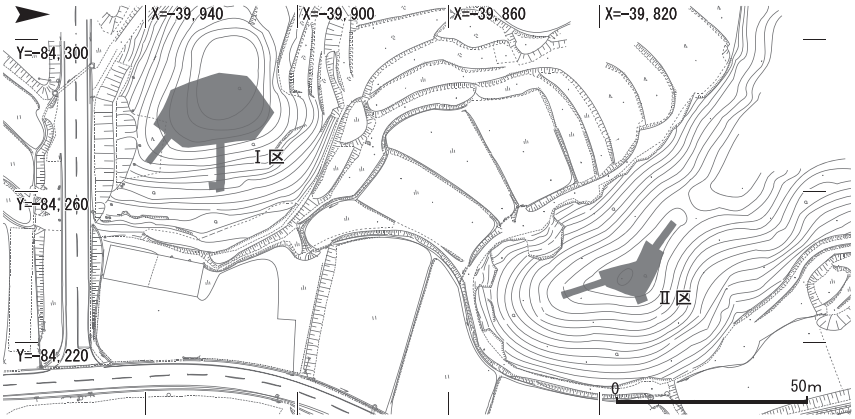
調査面積　600㎡

はじめに　平ヶ岡古墳群は、峰山盆地北端部に位置し、丹後半島を北流する竹野川左岸の丘陵上に立地する。今回の発掘調査は、掛津峰山線広域連携交付金(改築)業務に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。令和元年度に第１次調査として小規模調査を行ったⅡ区の未調査部分およびⅠ区の面的調査を行った。

調査の概要　南東方向に張り出す２つの丘陵のうち、南側の丘陵先端をⅠ区、北側の丘陵をⅡ区として調査した。Ⅰ区では掘立柱建物１棟（ＳＢ10）のほか性格不明の土坑数基を検出した。ＳＢ10は、桁行４間(6.9m)、梁行２間(3.7m)である。建物方位は東西方向からやや北に振る。柱穴埋土から、７世紀代の土師器および須恵器が出土した。Ⅱ区では土坑２基（ＳＫ01・ＳＫ02）を検出した。遺物は出土しなかった。

第１図　調査地位地図(国土地理院　1/25,000　峰山)

まとめ　Ⅰ区は調査前に古墳と想定されたが、調査の結果、掘立柱建物ＳＢ10を検出した。ＳＢ10は丘陵平坦面を避けるように東側斜面に建てられている。丘陵平坦面では遺構は検出していないが、平坦面の土地利用を避けて建てられた可能性が考えられる。Ⅱ区では丘陵の頂部からやや北西側と、南側丘陵斜面に土坑を検出した。いずれも出土遺物はなく、性格は不明である。第１次調査で土坑周辺から古墳時代後期の須恵器が出土しており、埋葬施設の可能性も考えられる。



第２図　調査区配置図（Ｓ＝1/2,000）

（名村威彦）

8．新町遺跡第２次

所 在 地　京丹後市峰山町新町・荒山

調査期間　令和２年７月６日～令和３年２月26日

調査面積　1,610㎡

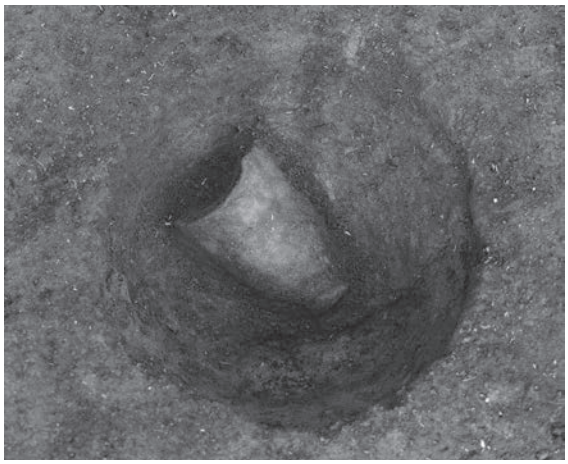
はじめに　今回の発掘調査は、国道312号道路新設改良事業に伴い京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。新町遺跡は尾根筋上に位置し、周囲の谷低地との比高差は５m前後を測る。まず小規模調査を行い、その結果を受けて本調査を実施した。遺構面は山地由来の地山ではなく、風化花崗岩の二次堆積層である。

調査の概要　縄文時代早期から中世にかけての遺構を検出した。縄文時代の遺構には、土器埋設遺構ＳＸ205（早期後半）１基、その他のピット、自然河川跡（早期・後期）がある。ＳＸ205の掘形は、直径0.56m、深さ0.28mの規模を測り、内部に完形の深鉢（口径15cm、器高25cm）を斜傾させて据えている。弥生時代後期～古墳時代では、方形竪穴建物１基（弥生末～古墳前期）・土坑（古墳前期）及び多数の柱穴を検出した。中世では、井戸・土坑・柱穴を検出した。

出土遺物　縄文時代では、条痕文深鉢・押型文土器・磨消縄文土器、磨製石斧・礫石錘・打製石鏃・勾玉（滑石製）・石器剥片多数が出土した。弥生～古墳時代では、土師器の壺・甕・高杯・小型丸底壺及び須恵器が出土した。中世では土師皿・陶磁器・鉄製刀子が出土している。

まとめ　今回の調査では、散布地として知られていた当遺跡から縄文時代早期から中世にいたる竪穴建物・井戸・土坑・柱穴等がみつかり集落遺跡であることが明らかになった。特に注目される縄文時代早期の深鉢の埋設遺構は、いわゆる埋甕行為が成立する以前の資料であり、その性格の解明は今後の大きな課題である。なお、京都府北部での埋甕遺構の検出例はいずれも後期で、舞鶴市桑飼下遺跡・京丹後市平遺跡の２例がある。（竹原一彦）

調査地位置図（国土地理院　1/25,000　峰山）



土器埋設遺構ＳＸ205出土状況（南西から）

９．稚児野遺跡第３次

所 在 地　福知山市夜久野町井田

調査期間　令和２年６月１日～令和３年２月８日

調査面積　3,300㎡

はじめに　今回の調査は、国土交通省福知山河川国道事務所の依頼を受けた国道９号夜久野改良工事に伴う稚児野遺跡の第３次調査である。稚児野遺跡は、山間部から南に伸びる小高い台地（段丘）上に広がり、これまで縄文時代から平安時代にかけての遺物散布地として知られていた。昭和56年度の発掘調査（第１次）では、顕著な遺構・遺物は得られなかったが、昨年度の第２次調査で、後期旧石器時代の石器類が出土した。これを受けて、今年度は調査対象地の東側で本格的調査を実施した。その結果、石器類の内容やそれらの分布状況などが明らかとなった。

調査概要　調査は、耕作土およびクロボク土の重機掘削から始めた。調査区内における標準的な土層の堆積状況は、上からクロボク土（耕作土など）、暗褐色シルト（姶良丹沢火山灰を含む）、黄褐色シルト（石器出土層）、赤褐色礫混じりシルト（無遺物層）、段丘礫層（無遺物層）である。石器類は約３万年前の姶良丹沢火山灰を含む層より下位で出土している。

石器類の出土は調査地の南半部において顕著で、北半分および谷の傾斜地となる南西部ではほとんどみられない。石器類の点数はおよそ800点で、その分布状況は、南東から北西にかけて紡錘形の広がりをみせる。石器類にはナイフ形石器、掻器、刃部磨製石斧などの定形石器や、剥離作業で生じた剥片・砕片がある。定形石器は、ナイフ形石器４点、掻器２点、刃部磨製石斧３点及び平坦剥離や鋸歯状の刃部をもつ削器・敲石である。剥片には大小の縦長・横長剥片、貝殻状剥片、不定形剥片などがある。これらの石器類が比較的まとまって分布する集中部（ブロック）を大きく９か所で確認した。集中部の規模は７～10mの円形および楕円形のものである。

石器類の石材についてみる。石材はサヌカイト、チャート、黒曜石、頁岩･シルト岩、花崗岩などがある。これらのうち、チャートは丹波山地において入手可能であるが、サヌカイトは奈良県と大阪府の境に位置する二上山産、黒曜石は島根県隠岐島産とみられ、遠隔地からの移動や交易を考えなければならない。なお、ナイフ形石器、掻器、

調査地位置図（国土地理院　1/25,000　福知山西部）

削器などの利器類にはサヌカイトとチャートが、刃部磨製石斧には、多くの剥片とともに在地のシルト質の石材が用いられている。サヌカイトとチャートの割合は、およそ７対３でサヌカイトが多い。チャート製石器類の分布は、ほぼ調査区北西部にまとまっており、地点ごとに石材の使い分けがされていたか、時期差によるものかもしれない。

まとめ　調査の結果、旧石器時代における約800点の石器類が、複数の集中部（ブロック）を伴って出土した。石器類の年代は、約３万年前の姶良丹沢火山灰層より古く、形態上の特徴から約36,000年前の後期旧石器時代前半期である。ナイフ形石器、掻器、削器、刃部磨製石斧など、本時期に特徴的な定形石器も出土した。また、石器類の石材には、チャートやシルト質石材もあるが、二上山産とみられるサヌカイトや隠岐島産の黒曜石がみられ、それらは遠隔地への広範囲にわたる移動の証拠ともいえる。今後、接合作業などから複数の石器集中部の構造を明らかにできよう。また、遠隔地石材の分布から人の移動が明らかにできる。加えて、板井・寺ヶ谷遺跡、春日七日市遺跡など丹波山地における遺跡群との比較などから、当地の旧石器時代社会を考えていくことができ、今回の調査の成果はとても大きいといえよう。　（黒坪一樹）

調査地全景（西から）

10. 水主神社東遺跡第14次

所 在 地　城陽市寺田金尾・大畔

調査期間　令和２年４月28日～令和３年３月４日

調査面積　3,400㎡

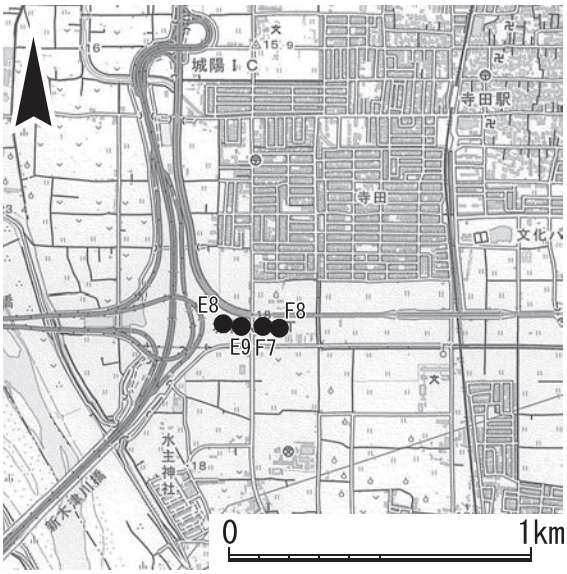
はじめに　水主神社東遺跡は城陽市の西部、木津川右岸の微高地と後背湿地に立地しており、これまでの調査により、縄文時代から近世にいたる複合遺跡であることが明らかになっている。今回の調査は、国道24号寺田拡幅事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、新名神高速道路城陽ジャンクションに近接した位置にあたり、西から、Ｅ８、Ｅ９区、府道を挟んでＦ７、Ｆ８ａ・ｂ区の４地区５トレンチである。

調査の概要　中世以降の島畑を10基、島畑周囲の平坦面で耕作溝群６か所、溜め井戸２基を検出した。島畑以前の遺構として、Ｅ９区で時期不明の溝２条、Ｆ８区で氾濫流路を３条確認した。

島畑は、南北方向に長辺が有するものがほとんどで、Ｆ８区の東端で検出した島畑のみが東西方向である。島畑周囲の低地で検出した小溝群は、小ピット状の凸凹が列状に連なって溝状を呈したものが複数条平行している。小ピット内には地山の黄灰色シルトと灰色シルトが混じり込んでおり、足跡、鋤跡、根株の痕跡と想定される。これらの耕作溝群と島畑との境はほぼ垂直に立ち上がっていることから、ある段階に島畑の裾を削りとって、畑地に転用したものと考えられる。Ｆ８区では島畑の周囲の低地で溜め井戸を検出しており、このことも島畑の周囲の平地が畑地としても利用されていたことを傍証するものである。

３条の氾濫流路は東南東から西北西に向けて、ほぼ平行して形成されている。規模は最大で幅２ｍを超え、深さも１ｍ近くあり、長さは最長で60ｍ以上にわたるものを確認した。これらの流路が１回の氾濫により形成されたのかどうかは不明である。

まとめ　島畑の周囲の低地では水田が営まれていたと考えられているが、今回の調査では、耕作溝や井戸を検出し、畑地として利用される場合があったことが判明した。その際に、島畑の一部を削って畑地に転用することがあったようである。氾濫流路は長さが60ｍを超えて確認し、大規模なものであることがわかった。



（岩松　保）　　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　宇治）

11. 小樋尻遺跡第10次

所 在 地　城陽市寺田島垣内、富野久保田

調査期間　令和２年４月28日～令和３年３月４日

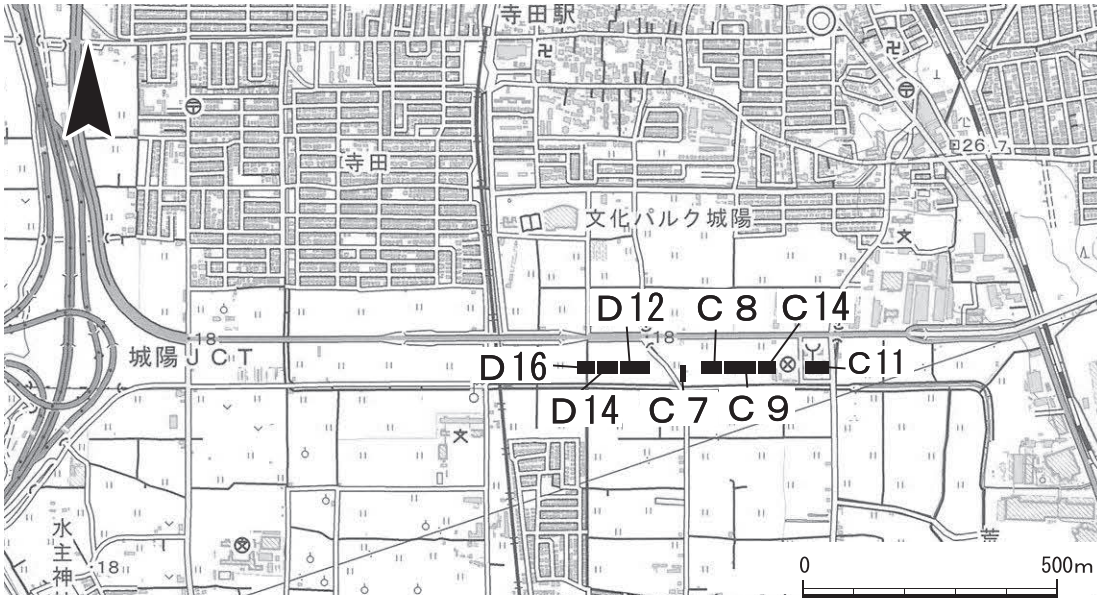
調査面積　4,820㎡

はじめに　小樋尻遺跡は、城陽市のほぼ中央部の木津川右岸に位置し、木津川により形成された沖積平野部に立地する。これまでの調査で、縄文時代晩期の竪穴建物や埋設遺構、古墳時代前期の集落や流路、古墳時代後期の集落、奈良時代の集落、中世以降の島畑群が確認されている。

今回の調査は、国道24号寺田拡幅事業に先立ち、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。調査区はＣ７区、Ｃ８区、Ｃ９区、Ｃ11区、Ｃ14区、Ｄ12区、Ｄ14区、Ｄ16区の８か所である。

調査の概要　今回の調査では、中世以降に造営された島畑、古墳時代後期～奈良時代の溝、古墳時代前期の溝、縄文時代晩期の土器埋設遺構、古墳時代前期の流路や縄文時代後期～弥生時代の流路を確認した。

①Ｃ地区　Ｃ７区は、南調査区と北調査区に分かれる。南調査区では南北方向の溝１条、北西から南東方向にかけての溝１条、東西方向の溝１条を検出した。北西から南東方向にかけての溝の埋土からは土師器や須恵器が出土したが、明確な時期を示すような出土遺物はなかった。また、調査区南端では南への落ち込みを検出した。北調査区では遺構は検出されず、地表下約４ｍまで断ち割りを行い、青灰色粘質土の堆積を確認した。これは、南調査区で検出した東西方向の溝の埋土と考えられる。両調査区で検出した東西方向の溝は幅25m以上と推定される。隣接するＣ５・



調査区配置図（1/15,000）

Ｃ６区で検出された古墳時代前期と縄文時代後期～弥生時代の流路と、古墳時代後期～奈良時代の溝の南側延長部分と考えられる。

Ｃ８区は、西調査区と東調査区に分かれる。両調査区でそれぞれ１基ずつ島畑が検出された。また、東調査区東端の断ち割りでは、南北方向に延びる旧河道跡の西肩を確認した。

Ｃ９区は、Ｃ８区の東側に隣接しており、西調査区、中央調査区、東調査区の３つに分かれる。島畑を、西調査区と中央調査区を跨いで１基、中央調査区と東調査区を跨いで１基検出した。それぞれの島畑の裾付近には竹暗渠が設置されていた。また、南北方向の溝を西調査区で３条、東調査区で３条の計６条検出した。溝の埋土からは、土師器・須恵器・瓦器が出土した。さらに、西調査区では、縄文時代の土器埋設遺構を検出した。埋設遺構は縄文時代晩期のもので、口縁部を東にして横向きに埋設されていたが、上半部は島畑間の耕作により削平されていた。検出標高は約15.7mである。

Ｃ11区は、旧城陽市消防本部建物の基礎や浄化槽による攪乱が随所にみられた。調査区西端から東に延びる幅約1.3mの東西溝１条を確認した。

Ｃ14区は、Ｃ９区の東側に隣接し、調査区の中央で近世の島畑１基、調査区東端で南北溝２条を確認した。Ｃ11・14区は遺構確認のみを行い、遺構掘削は次年度に実施することとなった。

②Ｄ地区　Ｄ12区は、上層で中世の島畑３基と南北方向の溝２条、下層で時期不明の南北方向の溝１条と古墳時代前期の北西から南東方向の自然流路を検出した。島畑の下層で検出した自然流路からは、古墳時代前期の小型丸底壺や高杯などの土師器が出土した。

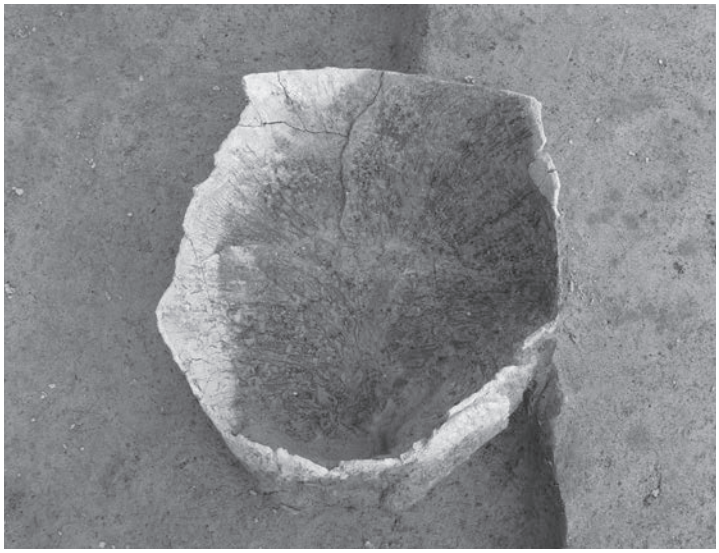
Ｄ14区では、島畑４基、島畑上の南北方向の溝１条と北西から南東方向に延びる溝１条を検出した。北西から南東に延びる溝の埋土からは時期を示すような出土遺物はなかった。

Ｄ16区は、南北方向の島畑３基と島畑上面で南北方向の耕作溝１条を検出した。

まとめ　今年度の調査では13基の島畑を検出したが、すべて南北方向の島畑であった。これまでの調査で検出した島畑もすべて南北方向で、小樋尻遺跡での島畑は南北方向に統一されていたと考えられる。中世における土地利用の様子を知る貴重な成果となった。

くわえて、Ｃ９区では縄文時代晩期の埋設遺構を検出したことも重要な成果といえよう。ここから南東約350mの地点では、縄文時代晩期の竪穴建物や埋甕遺構がみつかっており、周辺に同時期の集落が点在している可能性を示す成果となった。

（小泉裕司・中尾真琴）



Ｃ９区土器埋設遺構ＳＸ07完掘状況

12. 小樋尻遺跡第10次（Ｃ５区）・第11次（Ｃ６区）

所 在 地　城陽市富野久保田

調査期間　令和２年４月20日～12月25日

調査面積　1,580㎡

はじめに　小樋尻遺跡は、城陽市西部の木津川右岸中流域に形成された沖積平野に位置する。これまでの発掘調査では、縄文時代晩期の竪穴建物、土器埋設遺構、弥生時代から古墳時代の小規模な溝、古墳時代前期の竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物、中世の島畑などが見つかっている。

令和２年度の新名神高速道路整備事業に伴うＣ５区ならびに国道24号寺田拡幅事業に伴うＣ６区の発掘調査は、令和元年度の調査において、大規模な溝が検出されたため、令和２年度に引き続き調査を実施したものである。両調査区で検出された大規模な溝は、同一の遺構であるため、令和２年度調査では、両調査区を結合して調査を行った。

調査の概要　今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代前期の流路ＮＲ２と、古墳時代後期に掘削され、奈良時代まで使用されていた人工的な溝ＳＤ１を重複して検出した。また、流路ＮＲ２の下層では、縄文時代晩期の自然流路ＮＲ３の一部と縄文時代後期から晩期の旧河道ＮＲ４を確認し、調査区西側、旧河道ＮＲ４の河岸にあたる部分では、縄文時代の遺構を確認した。

溝ＳＤ１は、流路ＮＲ２が埋没した後に、あらたに掘削された溝である。幅約11m、深さ約1.8mを測る。溝法面には段差を造り出す。溝底は平坦であり、箱型の断面形となる。

溝の法面両側は、不定形な盛土で造成されている。また、溝底全面からは足跡を検出した。溝は複数回にわたって掘削が繰り返され、法面には、草本類を敷き、造成土を強化した土木技術である敷葉工法が用いられていた。

第１図　調査地位置図
国土地理院　１／25,000　宇治)

溝北側では、木材を溝に直交して設置した堰ＳＸ35を検出したことから、水位を調整したと考えられる。さらに、溝南側では、溝と並行する杭列ＳＸ44を検出した。

溝の盛土内からは、古墳時代後期の須恵器が出土し、溝内部からは、奈良時代の須恵器と祭祀に関係する木製品である斎串と人形が出土した。

流路ＮＲ２は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて存続し、幅約25m、深さ約2.7mの規模を測り、自然流路の一部を人工的に改変したものである。流路内からは、木材を杭

で固定し、水流を調整する施設である堰ＳＸ51・導水施設ＳＸ55・杭列ＳＸ52などを検出した。導水施設ＳＸ55は堰板で水を止め、上澄みの浄水を木樋に流し、祭祀を執り行っていたと考えられる。導水施設ＳＸ55の周辺では、漆塗りの盾、燃えさし、桃種など祭祀で用いられたと考えられる遺物が出土した。

また、導水施設ＳＸ55の北側で、土器集積ＳＸ36を検出した。土器は古墳時代前期の高杯・器台・小型丸底壺の出土が大多数を占める。

流路ＮＲ02内部からは、弥生土器や多量の古式土師器とともに、鍬・鋤・鎌柄などの木製農工具や琴・櫂・盤・槽・案・腰掛などの木製品や勾玉などが出土した。

流路ＮＲ２の下層では、調査区西部で、縄文時代晩期の自然流路ＮＲ３の一部を、調査区西部から東部にかけて、縄文時代後期から晩期の旧河道ＮＲ４を検出した。

自然流路ＮＲ３は、木津川の氾濫により形成された氾濫流路と考えられ、調査区の南西側で旧河道ＮＲ４と合流している。ＮＲ３の埋土から縄文時代晩期中葉の土器が出土したほか、多数の木材、堅果類、種子などが出土した。洪水により、周辺の植生を巻き込んで堆積したと考えられる。

旧河道ＮＲ４西岸は、流路ＮＲ２西岸と同一位置に当たるが、東岸は調査区外となることから、大規模な旧河道であったと考えられる。旧河道の最上層からは縄文時代晩期の土器が出土した。

調査区西部では、縄文時代後期の小規模な土坑を検出したほか、遺物包含層中から、縄文時代後期の土器と石器が多数出土した。また、旧河道ＮＲ４の河岸では、樹根を検出したことから、周辺に植生の発達が確認できる。旧河道と河岸の植生を利用した生業活動が行われていたと考えられる。

まとめ　今回の調査では３時期の遺構を重複して検出した。

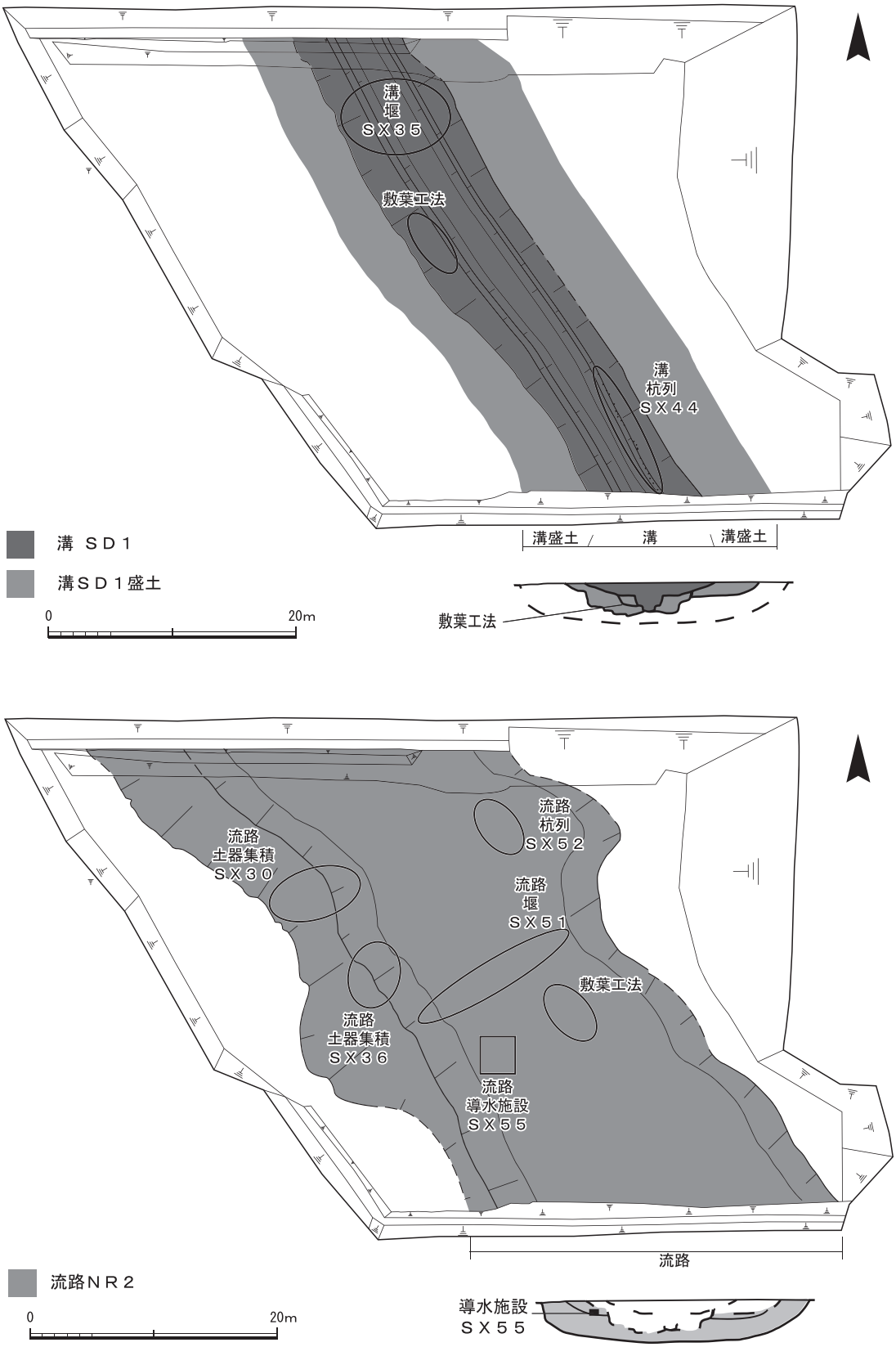
縄文時代後期に旧河道ＮＲ４が形成されたのち、縄文時代晩期後葉には、周辺に洪水流が押し寄せ、旧河道も縮小化しながら、埋没したと考えられる。

その後、弥生時代中期には再び、大規模な流路ＮＲ２が自然の営力によって開削され、古墳時代前期には流路ＮＲ２を人為的に改変して利用したと考えられる。特に注目されるのは、流路内に導水施設ＳＸ55を構築し、水辺の祭祀が行われていたことである。時期は新しくなるが、小樋尻遺跡の周辺に位置する久津川車塚古墳では導水施設を模したと考えられる囲形埴輪と木樋形土製品が出土している。また、芝ヶ原10・11号墳でも、木樋形土製品が出土している。古墳時代における祭祀の実態を考察するうえでも貴重な成果と考えられる。

その後の古墳時代後期には、埋没した流路ＮＲ２を再掘削し、飛鳥・奈良時代を通して人工水路として長期間にわたり、維持・管理されていたと考えられる。

このように、流路ＮＲ２と溝ＳＤ１は、祭祀を執り行う場所であるとともに、周辺の耕作地などに水を供給する灌漑のための水路のほか、溝の規模から水運として利用されていた可能性もある。

『和名抄』には「山城国久世郡栗隈郷」と記載があり、現在の宇治市大久保周辺の木津川右岸、宇治丘陵西部の平野部と考えられる。小樋尻遺跡の位置する地域は、古代に「栗隈」と呼ばれており、『日本書紀』には、仁徳十二年十月条「冬十月、掘大溝於山背栗熊縣、以潤田。是以、其



第２図　調査区平面・断面模式図

百姓毎年豐之」、推古15(607)年「是歳冬、於倭國、作高市池・藤原池・肩岡池・菅原池。山背國、掘大溝於栗隈。且河内國、作戸苅池・依網池。亦毎國置屯倉。」という記載から、仁徳朝と推古朝に栗隈の地に大溝が掘られ、「栗隈」の地において、低地の開発があったと考えられる。

『日本書紀』に記載された「栗隈」の大規模な開発にかかわる伝承は、今回の調査で検出された流路ＮＲ２と溝ＳＤ１の整備や掘削を反映している可能性も考えられる。

小樋尻遺跡の周辺では、古墳時代前期に久津川古墳群の造営がはじまり、森山遺跡には豪族居館とされる方形区画が見つかっている。古墳時代の後期においても久津川古墳群の造営は継続されているほか、芝山遺跡をはじめとする集落が増加する。その後の飛鳥から奈良時代になると、古代寺院である久世廃寺、平川廃寺が造営され、奈良時代の久世郡衙と推定される正道官衙が設置される。

このように、小樋尻遺跡の周辺には、集落のほかに、前方後円墳や古代の寺院と役所など、各時代に有力な地域勢力が存在した。今回確認された流路や溝は、地域の首長層による、木津川右岸中流域低地部の大規模な開発や祭祀が行われた実態を示す貴重な成果である。　（福山博章）

写真　調査区（流路跡）全景

13. 芝山遺跡・芝山古墳群第21次

所 在 地　城陽市富野北ノ芝・中ノ芝

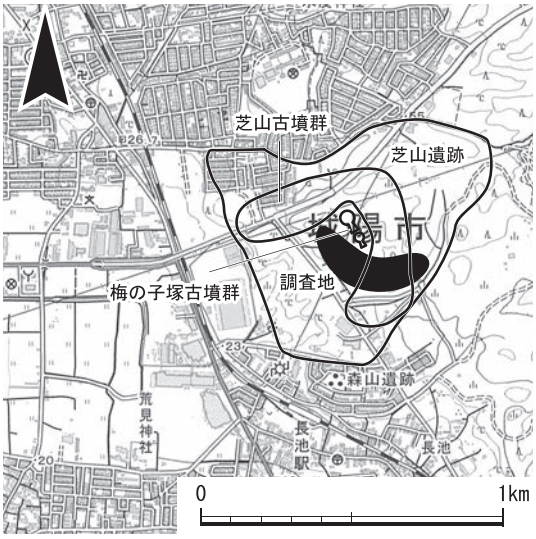
調査期間　令和２年５月７日～令和３年２月26日

調査面積　4,850㎡

はじめに　芝山遺跡は、城陽市東部に広がる丘陵上に位置し、東西約950m、南北約840mの範囲に広がる集落遺跡で、重複して芝山古墳群が所在する（第１図）。これまでの20次にわたる調査で、古墳時代の竪穴建物や32基の中小規模の古墳、奈良時代の掘立柱建物、道路状遺構などが見つかっている。今回の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。

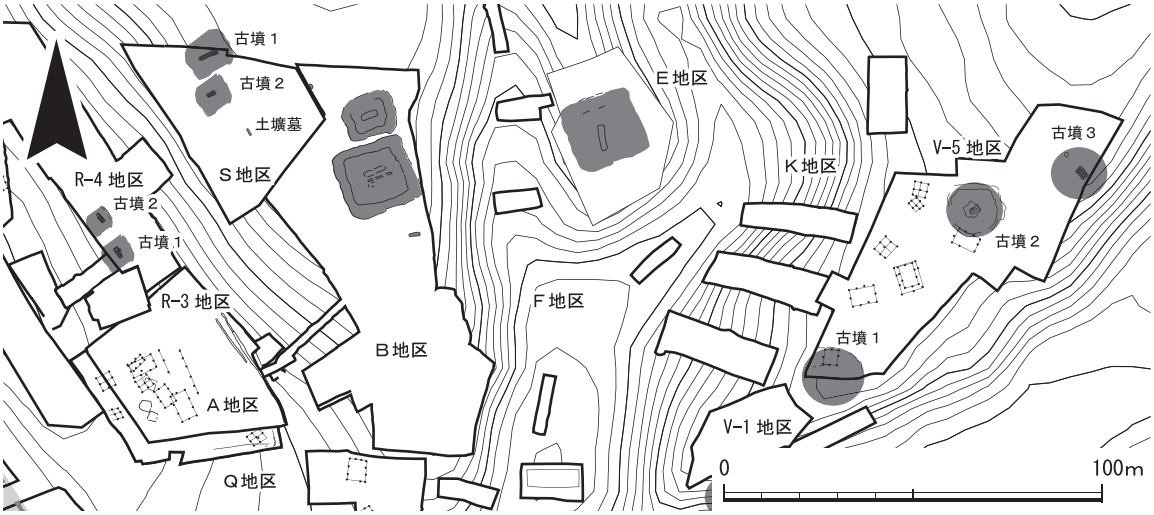
R-４地区　南東方向にのびる丘陵西側斜面に位置し、調査区南西部で古墳時代中期の古墳２基、埋葬施設に伴う溝１条を検出した。古墳１の埋葬施設は、全長3.1mの組合せ式木棺である。木棺上部は粘土で覆い、南北の両小口板を粘土で固定する。棺内から蛇行剣２振り、滑石製臼玉６点、刀子１点、棺外から鉄鏃３点が出土した（写真１）。周溝は持たず、墳丘は後世の削平により消失したと考えられる。古墳２の埋葬施設は、古墳１から約７m北に位置する組合せ式木棺で、全長2.9mを測る。南北に小口差し込み穴を設ける。棺内からは古墳時代中期の鉄剣、鹿角装刀子が各１点出土した。古墳２から約1.6m東に丘陵部と墓域を分ける溝を検出し、溝内から鉄鏃３点が出土した。古墳１・２ともに墳丘規模は明らかでない。

S地区　梅の子塚２号墳の南側に位置し、古墳２基・土壙墓１基、中世の溝１条、谷地形を検出した。古墳１は、調査区北端に位置し、全長4.8mの粘土槨を埋葬施設に持つ。周溝は認められず、墳丘は後世の削平によって消失したと考えられる。墓壙埋土から方格規矩鏡片（写真２）が出土した。棺内から遺物は出土しなかった。古墳２は、古墳１から約８m南西の位置に全長2.16mの割竹形木棺を配するもので、棺身と棺蓋の合わせ目に粘土を貼り付ける。遺物は出土しなかった。墳丘規模は不明である。



第１図　調査区配置図
（国土地理院　1/25,000　宇治）

V-5地区　遺跡の東側、南西方向に延びる傾斜の緩やかな丘陵上に位置する調査区で、古墳３基を検出し、奈良時代の掘立柱建物８棟を復元した。古墳１は、調査区南西で検出した推定径17.5mの円墳である。周溝の約1/4と埋葬施設の一部を検出した。古墳２は、調査区中央北よりに位置する径12.5mの円墳である。墳丘や周溝東側、南西側



第２図　調査区配置図(1/2,000)

写真１　R-4地区ＳＸ01蛇行剣出土状況

写真２　Ｓ地区ＳＸ02出土鏡

の一部、中心部が後世の攪乱を受け消失するが、埋葬施設がわずかに残存する。周溝や埋葬施設からは遺物は出土しなかった。古墳３は、調査区北東に位置する古墳である。組合せ式木棺を埋葬施設とし、棺外には須恵器の壺等がおかれ、棺内からは須恵器の杯身２点、杯蓋３点、鉄鏃１点、曲刃鎌１点、刀子１点などが出土した。

奈良時代の掘立柱建物は、建物の主軸の方位から、北から西へ約30°振る群、北から西へ約35°振る群、北から西へ約40°振る群、北から東へ約５°振る群の４群に分けられる。柱穴の切り合い関係から北から西への傾きが大きくなる群が後出し、北から東に振る群が最も新しいことが分かった。

まとめ　今回の調査で古墳７基と奈良時代の掘立柱建物８棟を検出した。これまで古墳時代前期末から中期前半は梅の子塚古墳群周辺を墓域とするが、古墳時代中期後半になると20m下の丘陵平坦面に墓域を移すと考えられていた。しかし、古墳時代後期においても丘陵上部で古墳が築造されており、複数の集団が丘陵を墓域として使用した可能性が考えられる。

また、奈良時代の掘立柱建物はこれまでの調査を合わせると100棟以上復元することができ、道路状遺構付近だけでなく東側の丘陵上まで広がることが判明した。

今回の調査成果から芝山古墳群の立地や造墓集団の性格、奈良時代の集落の広がりを考えるうえで重要な知見を得た。　（菅　博絵）

14. 堂後遺跡第１次・大岩原遺跡第１次

所 在 地　綴喜郡宇治田原町南堂後、南大岩原・泉水

調査期間　令和２年12月11日～令和３年２月18日（堂後遺跡）

令和３年１月25日～２月26日（大岩原遺跡）

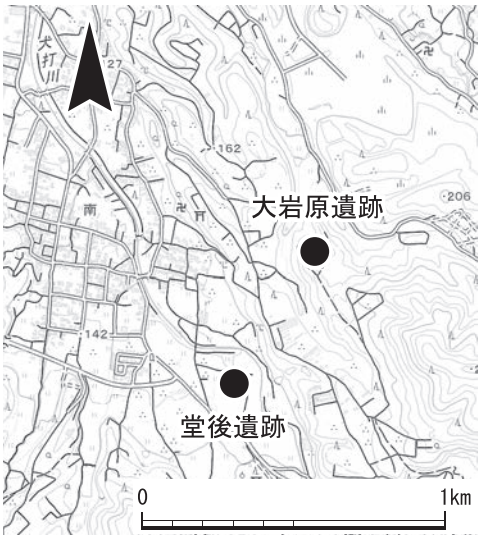
調査面積　200㎡（堂後遺跡）、550㎡（大岩原遺跡）

はじめに　国道307号（宇治田原山手線）道路新設改良事業ほかに先立つ調査である。京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した。

堂後遺跡は犬内川の左岸に位置し、川が蛇行する滑走斜面側の南北約150m、東西約145mの範囲が散布地として周知されている。大岩原遺跡は、堂後遺跡からは北東へ約400m隔てた位置にある丘陵上の南北140m、東西約140mの範囲が散布地として周知されている。

堂後遺跡の調査　調査対象地は畑として利用されていた場所にあり、畑の筆に対応して２か所の調査区を設定した。１区では地表下約0.5mで地山を検出したが、遺構は検出されなかった。遺物は近世の焼締陶器片が１点出土したのみである。２区では地表下約0.45mで土師器片や陶器片を多く含む二次堆積層を検出した。層の厚さは30～35cmである。

大岩原遺跡の調査　調査対象地は林業に伴う植林地として利用されている場所で、丘陵頂部の比較的平坦な場所を対象に４か所の調査区を設定した。１区～３区では表土直下で地山を検出したが、林業に関わる区画溝を検出したのみで他に遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。４区では地山上で精査を行ったところ、窯１基、落ち込み状遺構３基、林業に関わる溝１条を検した。窯ＳＹ01は調査区の北東部で検出した。掘形は上端で径0.9mを測る円形で、深さは0.24mである。完掘した形状は半球形で、側面が被熱により赤変硬化している。底面についても硬化はしていたが、赤変はしていなかった。埋土には微細な炭化物が少量含まれていたが、遺物の出土はなく時期不明である。この他にも調査区の中央部において、焼土が含まれる落込みを検出した（ＳＹ06）。落込みは幅約1.5m、長さ約２mの楕円形で、深さは0.02～0.04mである。焼土は径１～２㎝大の明褐色塊であり、落込みに被熱した状況は確認できなかったが、削平された窯などの残欠の可能性がある。

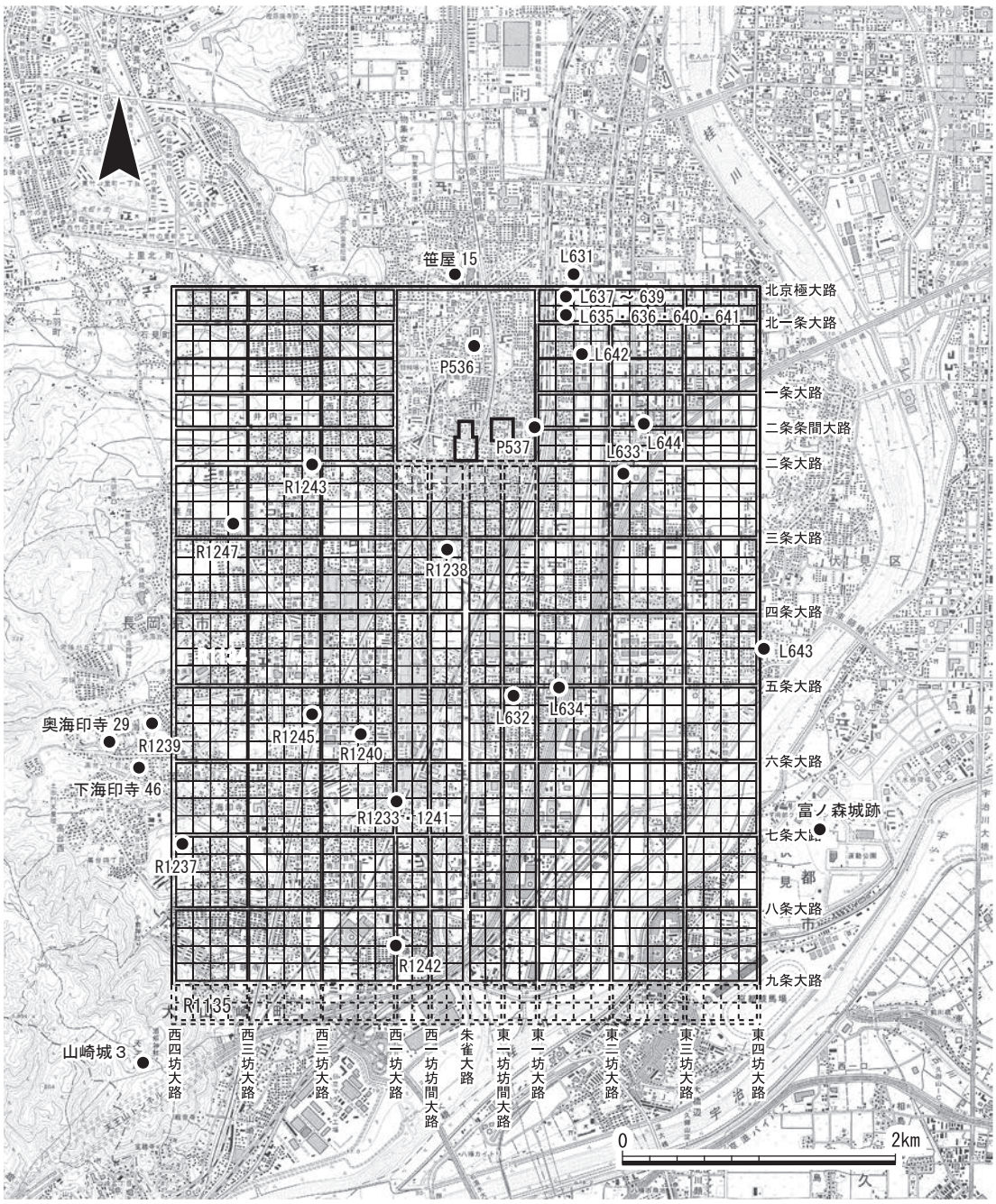


調査地位置図（国土地理院　1/25,000　宇治）

まとめ　堂後遺跡では、二次堆積と考えられる土師器や陶磁器片が多く出土した。大岩原遺跡では窯跡を検出したが、遺構・遺物とも希薄であることが明らかになった。（加藤雅士）

長岡京調査だより・136

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和３年２月から７月までの例会では、宮域２件、左京域13件、右京域11件、京域外４件の合計30件の調査報告があった。その中で、主要な調査例について報告する。



調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域　宮第536次調査地（向日市鶏冠井町東井戸）は、東面南門の推定位置に当たる。門に伴う事業痕跡はなく、整理箱20箱以上の遺物を含む土器溜まりが検出された。民間の開発行為に伴う試掘調査で小規模ながら本調査の実施が予定されている。

左京　左京633次～640次・642次調査（左京北一条二坊三・四・九・十一町、向日市森本町上町田・東ノ口）は、向日市森本東部地区区画整理事業に伴う調査である。**左京第639次調査**では、縄文時代から鎌倉時代に機能した埋没河川の調査が行われた。弥生時代には、縄文時代晩期に埋没した河川の上に幅0.5m前後の溝を開削しており、用水として利用されたことが考えられている。弥生時代中期の土器、石器が出土した。長岡京期には河川幅が広くなり、砂層内から須恵器・人面墨書土器・土馬・ミニチュア竈が出土している。**左京第642次調査**では東二坊坊間小路に伴う溝が検出されている。**左京第634次調査**（左京五条五条二坊二町、六条二坊一・八町・雲宮遺跡、長岡京市馬場六ノ坪）は小畑川が形成した扇状地内での大規模調査である。調査区の南半部が調査され、五条大路南北両測溝（幅約１m・深さ0.2m・長さ15m）を検出した。路面幅は約24mである。また、東二坊坊間西小路両測溝は小路幅約9.5m（溝幅0.7m・深さ0.1m）で検出した。五条大路南側溝埋没後に営まれた土坑内からは、長岡京期の土師器、須恵器（墨書土器含む）、土馬、獣骨が出土している。また、宅地内からは掘立柱建物、柵列、井戸が検出されたほか、神田古道（奈良時代）の路面に残されたと思われる轍痕跡を多数検出している。

右京　**右京第1240次調査**（右京六条二坊六町・開田遺跡、長岡京市開田４丁目）では、西二坊坊間小路東測溝が検出され、その東肩に25mに及ぶ杭列が残されていた。縄文時代の小土坑が見つかり、縄文土器・石鏃が出土している。**右京第1241次調査**（右京七条一坊十五町・十六町、開田遺跡）では、西一坊大路東側溝などが検出中である。**右京第1242次調査**（右京九条一坊十四町、大山崎町下植野梅ケ畑）の調査では、西一坊大路東測溝の位置で南北溝を確認した。調査地の北に位置する右京第374次調査分と合わせると南北77m分が確認されたことになった。長岡京跡では八条大路以南では今まで条坊測溝は確認されていない。調査地の北では西二坊大路は恵解山古墳に突き当り、周辺の調査でも存在しないことが明らかになっている。今回の調査地周辺では何らかの理由で部分施工されたと考えられる。**右京第1243次調査**（右京三条三坊一町、長岡京市今里更ノ町）では、上層から古代の掘立柱建物・柱穴列・溝などが、下層からは古墳時代の溝と柱穴が検出された。**右京第1244次調査**（右京七条一坊七町、長岡京市東神足２丁目）では、弥生時代の土坑、長岡京期の溝（七条条間小路側溝？）、中世の甕の据え付け穴（４連）が見つかった。**右京第1245次調査**（右京六条三坊二町・開田城ノ内遺跡、長岡京市天神1丁目）では、 弥生時代末期から古墳時代前期の湿地状堆積から土器と木製品が、加えてナイフ形石器が出土した。

京域外　**山崎城跡**では、石垣の測量が実施された。横大路被官衆の平城とされる**富ノ森城跡**の調査では、鎌倉時代後半から安土桃山時代にかけての集落が良好な状態で残されており、室町時代の掘立柱建物が検出された。（肥後弘幸）

現地公開

（令和３年２月～令和３年７月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

現在、当調査研究センターでは、令和２年の年頭から全世界規模で猛威を振るった新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、現地説明会・現地公開については、情勢を見極めつつ、実施の可否を判断しているところである。新型コロナウイルスについては、令和３年になってもその勢いが弱まらないため、現地公開を実施する発掘調査地を限定するとともに、十分な感染予防を実施した上で実施することとした。それ以外についても、随時、記者発表を行い、関係資料については、当調査研究センターのホームページからダウンロードできるようにしている。

現地公開

井手町栢ノ木遺跡　令和３年４月17日（土）に実施した。栢ノ木遺跡の調査は、橘諸兄創建とも伝わる井手寺跡の東側隣接地を対象に実施し、塔基壇跡などを検出した。検出された塔基壇跡は、基壇上部が水田の開墾等により削平されていたものの、基壇下部と基壇にとりつく階段、雨落ち溝、周囲の石敷きなどが良好な状態で遺存していた。また、塔基壇跡の周囲からは大量の瓦類をはじめ、金銅製品や施釉陶器などが出土した。検出状況や出土した瓦類に井手寺と同笵のものが認められることなどから、井手寺に伴う塔跡と判断される。

現地公開当日は１日中大粒の雨が降り続くという悪天候であったが、関心の高さを示して約400名の見学があった。また、事前に地元小中学生にも現地を見学していただいたほか、現地公開の前後にも研究者をはじめ多くの見学者が訪れ、最終的には655名の見学があった。

長岡京市長岡京跡右京第1241次　令和３年７月17日（土）に実施した。長岡京跡右京1241次調査では、長岡京右京西一坊大路東側溝とそれに並行する溝１条、掘立柱建物１棟、土坑など長岡京期の遺構・遺物を検出した。土坑からは円面硯が出土しており、調査地が長岡京の西市推定地に近いことから、関連する公的施設が存在した可能性が考えられる。

栢ノ木遺跡現地公開

現地公開当日は、102名が参加され、検出された掘立柱建物や出土遺物などを見学さ

長岡京跡（右京第1241次）現地公開

芝山遺跡調査地

れた。

記者発表

城陽市芝山遺跡　令和３年２月24日（水）に記者発表を実施した。今回の調査で平成27年度から継続して実施してきた芝山遺跡の発掘調査はすべて終了することとなった。記者発表に当たっては、令和２年度の調査成果とともに、これまでの調査成果を総括して報告することした。

令和２年度の調査では、墳丘の消失した古墳も含めて新たに７基の古墳を確認し、そのうち１基からは蛇行剣２本が出土した。京都府内では３例目にあたる。また、東側の丘陵上を中心に奈良時代の掘立柱建物８棟検出した。

これまでの調査成果をまとめると、古墳37基と奈良時代を中心とする掘立柱建物104棟を確認した。古墳は、古墳時代前期後半から後期にかけて築造されたもので、いずれも一辺ないし直径が10～20m程度の中小規模の古墳である。埋葬施設には木棺直葬のほか、粘土槨や埴輪棺など、多彩な埋葬施設が確認された。また、過去の調査では、奈良時代～平安時代前期にかけての道路状遺構が見つかっており、100棟を超える掘立柱建物の大半は、その周辺に広がる集落跡と考えられる。一連の調査の結果、その変遷等を明らかにすることができた。

（筒井崇史）

普及啓発事業
（令和３年２月～令和３年７月）

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業への参加などの普及啓発活動を行っている。

現在、当調査研究センターでは、現地公開と同様、新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、埋蔵文化財セミナーをはじめとする普及啓発事業について、情勢を見極めつつ、実施の可否を判断しているところである。

なお、事業の開催に当たっては、十分な感染予防を実施した上で実施している。

埋蔵文化財セミナー

第145回埋蔵文化財セミナー　令和３年３月６日（土）　京都市のウイングス京都において開催した。第145回埋蔵文化財セミナーでは、「恭仁宮と長岡京　その実態に迫る！」と題し、木津川市に所在する恭仁宮跡と、京都市・向日市・長岡京市・大山崎町の３市１町にまたがる長岡京跡について、最新の調査成果をもとにして宮都の実態に迫ることを目的とした。

京都府教育委員会の中居和志副主査からは、「恭仁宮中心部の構造－朝堂院区画を中心として－」と題して、令和元・２年度の恭仁宮の発掘調査の結果、恭仁宮跡の朝堂院区画の四隅とともに、朝堂院・朝集院の区画規模が確定したことを報告した。また、今後の課題として、いわゆる「朝堂」が未確認であることや朝堂院の北側に位置する大極殿院回廊に関する遺構の検出が不十分であることなどを指摘した。

当調査研究センターの小池寛調査課長からは、「長岡京遷都の実態－周到に計画された遷都－」と題して、長岡京の遷都に先立って、河川の大規模な護岸施設を設けるなど、長岡京遷都に向けた準備が宝亀年間から開始されていたことを、文献と考古資料を検討することで導き出し、長岡京の遷都が周到に準備されていたことを明らかにした。

第145回埋蔵文化財セミナー講演風景

当日は新型コロナウイルス感染防止対策として、事前申し込み制であったが、京都府内を中心に116名の参加があり、報告内容も好評で、盛況のうちに終了した。

第146回埋蔵文化財セミナー　令和３年６月26日（土）　舞鶴市の舞鶴西公民館において開催した。第146回埋蔵文化財セミナーでは、「丹後中世寺院の実態　日本海をめぐる文物」と題し、舞鶴市をはじめとする京都府北部の中世寺院を取り上げ、最近の発掘調査の成果を報告するとともに、出土した遺物から日本海をめぐる文物の移動＝交流がどのように行われたのか、を検討することを目的に開催した。

当調査研究センターの竹村亮仁主任からは、「舞鶴市満願寺跡の発掘調査－中世寺院と貿易－」と題して、満願寺跡の発掘調査の成果を報告するとともに、出土した遺物には遠く中国大陸で生産されたものも含まれることから、中国大陸や朝鮮半島と日本、特に日本海ルートの交易等について検討を行った。

舞鶴市文化振興課の松﨑健太氏からは、「舞鶴市松尾寺仁王門の発掘調査成果」と題して、松尾寺の山門である仁王門の解体修理に伴う発掘調査の成果として、仁王門の変遷と出土遺物について報告をいただいた。調査の結果、松尾寺とは断定できないものの、当該地の土地利用が平安時代に始まったことが明らかにされた。また、先代仁王門の建立に伴う地鎮痕跡が見つかったことなどの報告があった。

第146回埋蔵文化財セミナー講演風景

宮津市教育委員会の河森一浩氏からは、「宮津市成相寺と丹後の中世寺院」と題して、史跡に指定された成相寺旧境内に係る発掘調査の成果について報告されるとともに、中世丹後の寺院について、その概要を紹介いただき、日本海をめぐる文物の交流に関して見通しを示していただいた。

当日は、京都府内を中心に63名の方が参加された。直前の６月20日まで新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言が発出されていたため、参加者がやや少なかったものの、盛況のうち終了した。

（筒井崇史）

第146回埋蔵文化財セミナー会場

センターの動向
（令和３年２月～令和３年７月）

２　１　井上理事長・上原理事・菱田理事栢ノ木遺跡（井手町）現地指導
　　３　第２回埋蔵文化財担当職員等講習会（オンライン開催）
　　８　中尾理事・高橋理事栢ノ木遺跡（井手町）現地指導
　　13　京都府立山城郷土資料館文化財講演会「土人形と京都－考古資料にみる江戸時代の文化－」
　　（講師：加藤調査員）
　　22　京都大学河上哲生先生栢ノ木遺跡（井手町）現地指導
　　24　長岡京連絡協議会、新名神芝山遺跡（城陽市）記者発表
３　６　第145回埋蔵文化財セミナー「恭仁宮と長岡京　その実態に迫る」（於：京都市、参加者116名）
　　12　全国埋蔵文化財連絡協議会近畿ブロック会議（オンライン開催）
　　17　長岡京連絡協議会
　　22　第37回理事会（於：センター、オンライン開催）
　　31　辞令交付式
４　１　辞令交付式
　　２　新規採用職員研修（～12日）
　　14　栢ノ木遺跡（井手町）記者発表
　　16　栢ノ木遺跡井手町内小中学生現地見学会（参加者170名）
　　17　栢ノ木遺跡（井手町）現地公開（参加者379名）
　　26　新名神下水主遺跡（城陽市）現地調査開始
　　27　長岡京跡ほか（長岡京市）現地調査開始
５　６　24号小樋尻遺跡（城陽市）現地調査開始
　　10　稚児野遺跡（福知山市）現地調査開始
　　11　菖蒲谷口遺跡（舞鶴市）現地調査開始、大宮峰山道路カンジョガキ遺跡（京丹後市）現地調査開始
　　12　佐屋利遺跡・三分井根遺跡（京丹後市）現地調査開始
　　14　別当稲泉遺跡（福知山市）現地調査開始
　　18　国道423号犬飼遺跡ほか（亀岡市）現地調査開始
　　19　長岡京連絡協議会
６　７　第39回理事会（於：センター、オンライン開催）
　　11　令和３年度第１回全埋協近畿ブロック主担者会議（オンライン開催）
　　17　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(オンライン開催）
　　23　第13回評議員会、長岡京連絡協議会
　　26　第146回埋蔵文化財セミナー「丹後中世寺院の実態　日本海をめぐる文物」（於：舞鶴市、参加者63名）
７　15　長岡京跡（長岡京市）記者発表
　　17　長岡京跡（長岡京市）現地公開（参加者102名）
　　19　別当稲泉遺跡（福知山市）現地調査終了
　　28　長岡京連絡協議会
　　29　菖蒲谷口遺跡（舞鶴市）現地調査終了

編集後記

長雨と厳しい暑さの続く夏もようやく終わりかけてきましたが、令和３年度の第１号となる『京都府埋蔵文化財情報』第140号が完成しましたので、お届けします。

本号では、40年の歩みの中での共同研究の動向をはじめとしたセンターの活動報告に加え、令和元年度の府内の発掘調査状況及び職員による１本の研究ノートなどを掲載しました。

なお、当調査研究センターは、昨年度で設立40周年を迎え８月には、職員・理事を含む53名の執筆者からなる京都府埋蔵文化財論集第８集を刊行しています。ホームページにも掲示していますので、ご一読いただければ幸いです。今後も発掘調査事業や研究および普及啓発事業に邁進していきたいと思います。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

（編集担当　筒井崇史）

京都府埋蔵文化財情報 第140号

令和３年９月30日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604－0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel　（075）256-0961　Fax　（075）231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER